

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 地域づくり総務大臣表彰

4

2005

3 巻頭エッセー ● 「創造的復旧」によるまちづくり 泉田裕彦（新潟県知事）

特集 平成16年度 地域づくり総務大臣表彰

4 平成16年度 地域づくり総務大臣表彰 三十二団体の活動と功績をたたえる

6 地域振興部門

- 自然体験村「虫夢とこころ昆虫の家」(北海道常呂町) 6
- 尾上町蔵保存利活用促進会(青森県尾上町) 7 ● あじ島冒険楽校(宮城県石巻市) 8
- 小国町黒沢峠敷石道保存会(山形県小国町) 9
- 東京ベイ・クリーンアップ大作戦実行委員会(東京都港区) 10
- 小田原銀座商店会(神奈川県小田原市) 11 ● 新潟県十日町地域広域事務組合 12
- 富山県南砺市 13 ● 大杉ミュージカルシアター(石川県小松市) 14
- 天龍村柚餅子生産者組合(長野県天龍村) 15 ● 大道芸ワールドカップ実行委員会(静岡市) 16
- 三重県鳥羽市 17 ● 三重県志摩市・あのりふぐ協議会(三重県志摩市) 18
- 大山崎竹林ボランティア(京都府大山崎町) 19 ● 雲雀丘山手緑化推進委員会(兵庫県宝塚市) 20
- 浜田石見神楽社中連絡協議会(島根県浜田市) 21 ● うだつの土曜祭実行委員会(徳島県つるぎ町) 22
- 久留米・ラーメンルネッサンス委員会(福岡県久留米市) 27
- アイアンマンジャパン地元実行委員会(長崎県五島市) 28 ● 宮崎県西米良村 29

30 国際化部門

- 酒田市国際交流サロン企画・運営委員会(山形県酒田市) 30
- TINの会(つくばインターナショナルネットワーク)(茨城県つくば市) 31
- ふくいユネスコ協会(福井市) 32 ● 静岡県浜松市 33
- 岩倉市国際交流協会(愛知県岩倉市) 34 ● 広島県蒲刈町(現 呉市) 35
- 三野町国際交流協会(香川県三野町) 36

37 情報化部門

- 福島県小高町 37 ● 宇治大好きネット(京都府宇治市) 38 ● 大阪府池田市 39
- はりまスマートスクールプロジェクト(兵庫県姫路市) 40 ● 石垣島閑話制作委員会(沖縄県石垣市) 41

レギュラーレポート

トピックス

42 「大和ミュージアム」が誕生！ 戸高一成（呉市海事歴史科学館）

第22回 地域づくり団体全国研修交流会

43 「歴史に遊び、未来を語る」奈良大会

平成16年度 地域おこし研修会報告

44 新しい土産品開発をどんどん進めていきたい [山形県酒田市] 登坂俊二

45 町の隠れた資源・魅力を再発見へ [福島県磐梯町] 渡部 建

46 センター通信



隔林亭



築地反射炉跡



大隈重信旧宅

グラビア

1・23 平成16年度 地域づくり総務大臣表彰

47 都道府県漫遊 ● 埼玉県

48 手前みそですが… ● 宮城県柴田町

写真／佐賀城本丸
歴史館(御殿)

● 文Ⅱ 沢
● カメラ
● 小形又男



鍋島三十六萬石大名行列まつり
佐賀市で三月二十日、NPO主催による「鍋島三十六萬石大名行列まつり」が行われた。地域に残る歴史資源を活かした地域起こしを進めようと、同まつり推進委員会（野中弘義理事長）が二〇〇一年から毎年、当時の装束による行列を再現。この日は折からの福岡県西方沖地震の影響で、参列者や見物客は少なかつたが、高張り提灯を先頭に、お姫さま、騎馬侍姿の行列が昨年夏再建された佐賀城本丸御殿をスタート、市内中心部を練り歩いた。同NPOは今後、長崎街道の宿場町との関係を深め、歴史に根付いたイベント交流を広げていく方針だ。

歴史の香りがする個性的なまちづくりに取り組む佐賀市は、「佐賀のいいところ」を「世界一のインテリジェント田園都市」の実現を目指している。吉野ヶ里遺跡と連携した市内の観光施設整備も進み、特に大型店の郊外進出で空洞化が進む中心市街地では、歴史的景観の整備とともに「市民が街に「来る」「交流人口を増やす」対策に取り組んでいる。

● 表紙Ⅱ 佐賀市



自然体験村「虫夢ところ昆虫の家」／北海道常呂町 ●地域振興部門 (p6) 川の中の水中生物観察体験

平成16年度 地域づくり総務大臣表彰



あじ島冒険楽校／宮城県石巻市
●地域振興部門 (p8) シーカヤックに挑戦



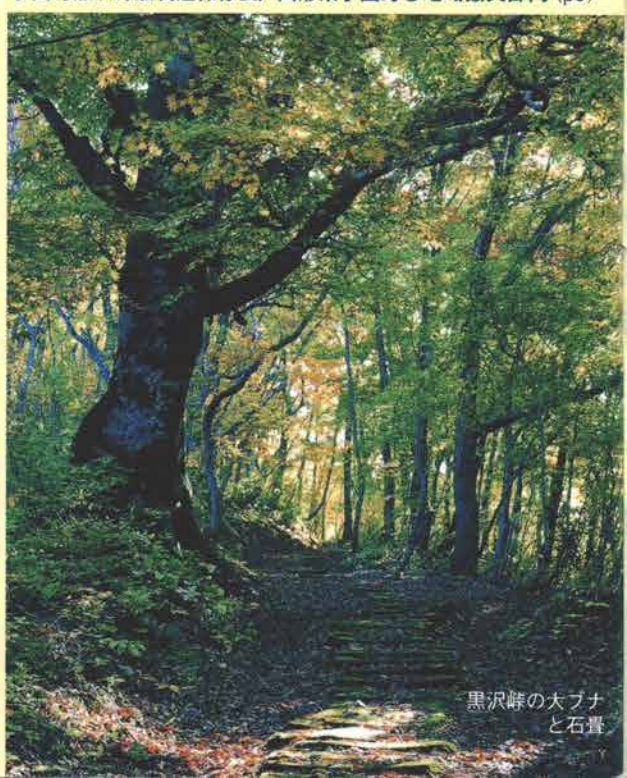
大学生・高校生対象の
地域案内人育成講座

尾上町蔵保存利活用促進会／青森県尾上町 ●地域振興部門 (p7)

小国町黒沢峠敷石道保存会／山形県小国町 ●地域振興部門 (p9)

東京ベイ・クリーンアップ大作戦実行委員会／東京都港区 ●地域振興部門 (p10)

東京湾お台場近くの海浜清掃風景



黒沢峠の大フナ
と石畳



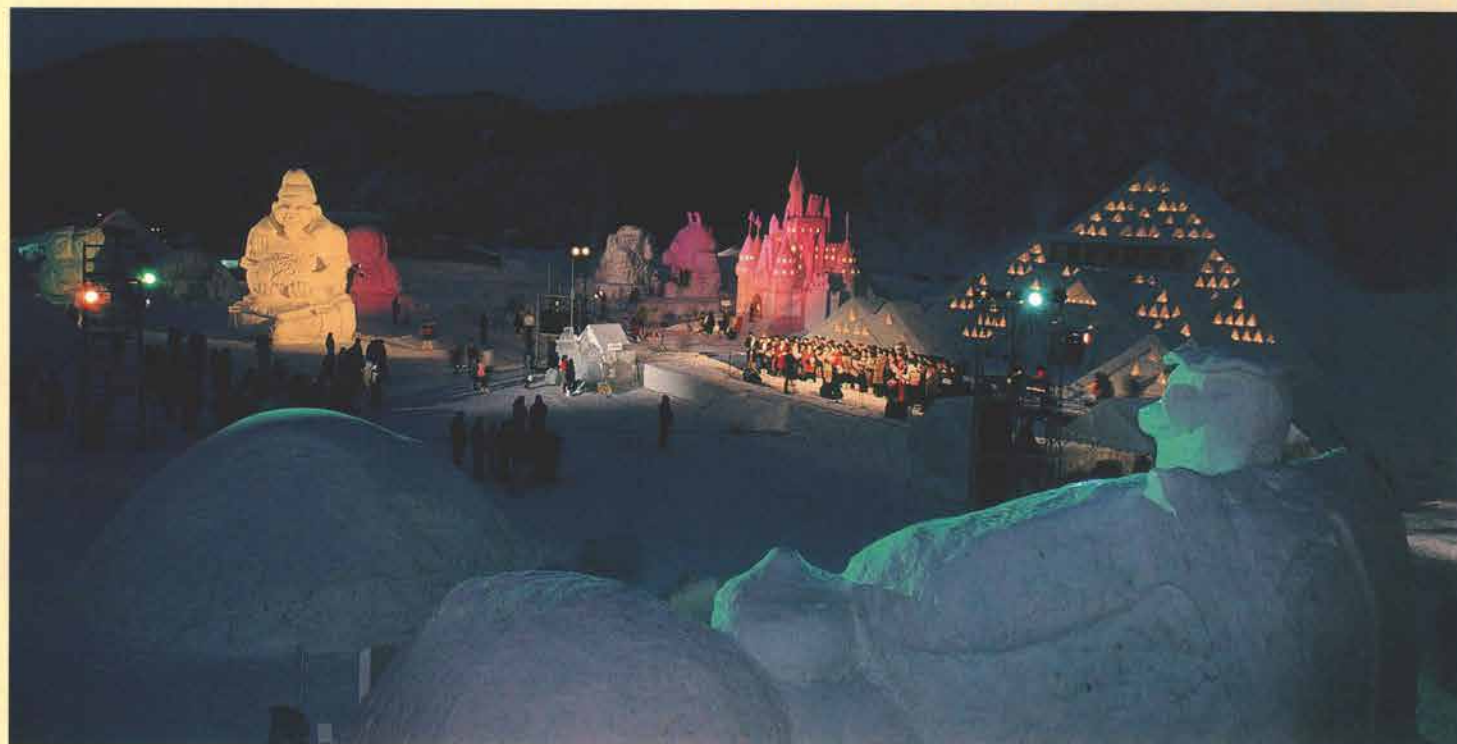
高校生チャレンジショップ
オープン式典(上)
高校生チャレンジショップ
と商店街イベント「浴
衣de夏祭り」の連携(左)

小田原銀座商店会
神奈川県小田原市
●地域振興部門
(p11)



新潟県十日町地域広域事務組合 ●地域振興部門 (p12) かさぎたちの家

富山県南砺市 ●地域振興部門 (p13) そば祭り会場の夜景「雪像ライトアップ」



天龍村柚餅子生産者組合/長野県天龍村 ●地域振興部門 (p15)



大杉ミュージカルシアター/石川県小松市 ●地域振興部門 (p14)
うたの郷大杉王国(1995年)



加工施設での柚餅子作り



新潟県知事
泉田裕彦

「創造的復旧」による まちづくり

昨年十月二十三日、新潟県の中央部にある中越地方を、最大震度七の激震が襲った。新潟県中越地震（中越大震災）である。

死者四十人、避難者約十万人、住宅損壊約十萬棟に及んだ未曾有の大災害から、間もなく半年近くが経とうとしている。本格的な降雪の前に、交通網はおおむね仮復旧を終えることができた。被災された方々の応急仮設住宅への入居も、正月前に終わることができた。雪国の長い冬を迎える前に、かろうじて応急対策を間に合わせることができたことは幸いだった。しかし、今冬の新潟は十九年ぶりの豪雪に見舞われた。被災地の人々にとって、ひとときも休まることのない日々が今も続いている。

深い雪との格闘の時期、同時に私たちは復興に向けたプランづくりに県民の英知を結集した。今回の震災からの復興に向けては、大規模な地盤災害からの復興、住居と農地などの生産基盤が密接不可分な中山間地の復興という、これまで例のない大きな課題がある。復興に当たっては、壊れたものをただ元に戻すだけでなく、将来に向かって有益なものを創り出していかなければならない。三月一日にまとまった「震災復興ビジョン」は、こうした方向性を示す、力強い県民宣言となった。雪解けとともに、県民一丸となって震災復興に取り組んでいきたい。

今回の震災により、高齢化率が四〇%にも上る山古志村（四月一日から長岡市と合併）では、全村民が村外の仮設住宅などでの避難生活を余儀なくされている。山古志はニシキゴイ発祥の地であり、本州唯一の牛の角突き（闘牛）の習俗が残されている。また、至る所に美しい棚田も残っていた。生活の場であると同時に生産の場でもある、こう

した「日本の原風景」ともいうべき土地が一瞬にして崩壊してしまった。被災地の地域コミュニティが危機にさらされている。大災害は、ゆつくりと進行してきた潜在的な問題を一気に顕在化させるといえる。

高齢化と過疎化が進行する中山間地を襲った大災害は、人口減少社会を目前に控えたわが国において、被災地だけの問題であろうはずがない。五年後、十年後にコミュニティが復活して、そこに住む人々が震災前よりも元気に、豊かに、そして安心して日々の営みを行っていくこと。これが中越大震災からの復興における最大の課題であり、こうした中山間地の復興のあり方は、日本全体の将来を左右する課題でもある。

また、三十年以内に七割の確率でマグニチュード七クラスの地震が南関東で発生すると言われている。災害列島日本において、都市と地方が別個に存在しているわけではない。防災意識の高い新潟県を目指しながら広域的な防災連携を進め、国の防災体制強化にも貢献していきたい。

今回の震災では、実に多くの方々から御支援をいただいた。全国各地からのボランティアをはじめ、自治体職員による復旧活動や救援活動への献身的な御支援、そして支援物資や義援金。県民の感謝の気持ちは、とても言葉では言い尽くせない。今度は新潟県が全国のお役に立つことで、こうした御支援に恩返ししていきたい。そのためには、一日も早く復興を成し遂げること、そして、復興の過程で、国土の七割を占める中山間地の災害復興に広く活かせるような、復興の「新潟モデル」を実現することが何よりも重要だと考えている。

三十二団体の活動と功績をたたえる

地域の個性豊かな発想

を活かし、住民をはじめ
としてさまざまな主体が
取り組む魅力あふれる地
域づくりを積極的に推進
し、顕著な功績のあった
市町村および地域づくり
団体をたたえる、平成十
六年度地域づくり総務大
臣表彰が決まり、東京・
千代田区のグランドア
ーク半蔵門で一月二十六
日、表彰式が行われた。

総務大臣の式辞後、表
彰を受けたのは「地域振
興部門」が二十団体、
「国際化部門」が七団体、
「情報化部門」が五団体
の三部門計三十二団体。

受賞32団体一覧

地域振興部門 <20団体>

- 自然体験村「虫夢ところ昆虫の家」(北海道常呂町)
- 尾上町蔵保存利活用促進会(青森県尾上町)
- あじ島冒険楽校(宮城県石巻市)
- 小国町黒沢峠敷石道保存会(山形県小国町)
- 東京ベイ・クリーンアップ大作戦実行委員会(東京都港区)
- 小田原銀座商店会(神奈川県小田原市)
- 新潟県十日町地域広域事務組合
- 富山県南砺市
- 大杉ミュージカルシアター(石川県小松市)
- 天龍村柚餅子生産者組合(長野県天龍村)
- 大道芸ワールドカップ実行委員会(静岡県)
- 三重県鳥羽市
- 三重県志摩市・あのりふぐ協議会(三重県志摩市)
- 大山崎竹林ボランティア(京都府大山崎町)
- 雲雀丘山手緑化推進委員会(兵庫県宝塚市)
- 浜田石見神楽社中連絡協議会(島根県浜田市)
- うだつの土曜祭実行委員会(徳島県つるぎ町)
- 久留米・ラーメンルネッサンス委員会(福岡県久留米市)
- アイアンマンジャパン地元実行委員会(長崎県五島市)
- 宮崎県西米良村

国際化部門 <7団体>

- 酒田市国際交流サロン企画・運営委員会(山形県酒田市)
- TINの会(つくばインターナショナルネットワーク)(茨城県つくば市)
- ふくいユネスコ協会(福井市)
- 静岡県浜松市
- 岩倉市国際交流協会(愛知県岩倉市)
- 広島県蒲刈町(現 呉市)
- 三野町国際交流協会(香川県三野町)

情報化部門 <5団体>

- 福島県小高町
- 宇治大好きネット(京都府宇治市)
- 大阪府池田市
- はりまスマートスクールプロジェクト(兵庫県姫路市)
- 石垣島閑話制作委員会(沖縄県石垣市)

●は、地域づくり団体等、●は地方公共団体

平成16年度 地域づくり総務大臣表彰式



各団体を表彰してその功績をたたえ、広く全国に周知することにより、地域づくりのさらなる発展を図るのが狙いだ。

今回の表彰団体は、前回（昨年は四部門計二十九団体）より三団体多かった。選定に当たっては、都道府県からの推薦団体と併せて、地域づくり懇談会構成員からの推薦団体についても対象とした。他の模範となる先進性やユニークさ、地域の独自性、活動の継続性、規

平成16年度 地域づくり総務大臣表彰式



模や内容の発展性、自主性、住民と行政の協働・連携性、住民の満足度や地域経済の活性化などを審査基準にして、決定した。

地域振興部門

空洞化が進行している中心市街地の活性化、地域特産品のブランド化、外部からの産業導入や地元産業の育成、地域伝統文化の振興、ごみの減量化やリサイクルの推進など地

国際化部門

域環境の保全、高齢者や障害者に配慮したまちづくり、子供を産みやすく育てやすい地域ぐるみのまちづくり、秩序ある街並みや景観整備などの美しいまちづくり、行政への住民参加などの面で顕著な功績があった市町村および団体が選ばれた。

情報化部門

姉妹都市交流などを通じて海外の地方公共団体や民間団体との文化・学術・青少年との交流、海外からの研修員の受け入れなど人づくりに対する協力、地域の国際化を推進するための人材や地域リーダーの育成、語学や国際協力に関する研修や海外派遣、在住外国人支援のための施策への取り組み、外国人観光客や外国企業の誘致活動に対する積極的な取り組みなどに顕著な功績があった市町村および団体が選ばれた。

各種申請・届出など手続きの電子化による行政運営の簡素・効率化への取り組み、ITの活用による行政手続きのワンストップサービス化やITを利用した便利なまちづくり、地域内光ファイバー網やインターネットを利用した地域情報化の推進、IT活用による地域文化や観光の振興、それに生涯学習・人材の育成、ホームページを活用した情報提供などに積極的に取り組んで顕著な功績のあった市町村および団体が選ばれた。

自然体験村「虫夢とこころ昆虫の家」

オホーツクの地域性を活かした体験学習の拠点



広報・ホームページ担当

● 藤吉裕和

「虫夢とこころ昆虫の家」は、携帯電話もつながらない山奥にある。もともとは廃校であった。この廃校が一人の熱い思いから今につながっている。

自衛隊を退官した男は、子供たちいろいろな自然を体験してほしいという情熱で、廃校を買い取り、たった一人でそれを子供たちが駆け回れるように整備を続けた。その姿を見た地域の人々は、一人、また一人と手を貸すようになった。それが、「昆虫の家」の原点である。

創始者である滝沢始さんはこの地に根を下ろしてから三年という短い期間後、この地でこの世を去



ニジマス池にエサをあげる子供たち

った。しかし、共に施設整備をしてきた地域の人々は、滝沢さんの熱い情熱を受け継ぎ、自分たちでこの施設を維持していくことを決めた。「虫夢友の会」の誕生である。

地域の力で廃校を整備

廃校となった後、養豚場として利用されていた旧吉野小学校は、施設内が通常の廃校と比べものにならないくらい荒れていた。これを、少しずつ、一つ一つみんなで整備を続けていった。

ここには、大きな地域の力があつた。行政の助成金などには頼らず、全員が本業に従事しながら休

日を利用したり、休暇を取ったりして施設の整備に当たった。すべては無償の行動としての協力であつた。しかし、施設維持には相当な経費が必要である。このため町内外を問わず会員を募り、会費を修繕費や維持費に充てた。

協力の輪が広がっていくにつれ、企業からも協力を得られるようになった。土木業者による池の整備、内装業者による壁紙の張り替え、断熱業者による建物の断熱化など、修繕・整備は多岐にわたる。

核家族化が進み、子供たちは親兄弟以外と一緒に生活する機会が少なくなつた。こんな子供たちが夏休み期間の二週間、昆虫の家で合宿を行う。当初は文部省の子供長期自然体験村事業として始まった。



常呂の漁師の協力で、オホーツクやサロマ湖でのホタテ漁、ホタテ養殖体験

オホーツクの地域性を活かしたさまざまなプログラム、地元の協力を得ながらの体験学習は、子供のみならず父母からも高い評価を得た。ここには、今の地域社会では少なくな

った「子供は地域のみんなで育てる」という思いが流れている。

地元おっちゃんとおっちゃんとの異世代交流の場

昆虫の家には、言葉遣いが悪い地域の「おっちゃん」たちが大勢いる。初めて参加した看護師（現養護教員）は、「ここには普通の人はいないのかと思った」という感想を話してくれた。豪快なおっちゃんパワーは子供も大人も圧倒する。

しかし、言葉遣いは悪くとも、全部の子供を自分のわが子のように扱っている。食事の作法といった基本的なことにはすごく厳しい。ひじを食卓に突いて食べているものなら、すぐに怒られてしまう。でも、一緒に遊んで遊ぶ時は、はたから見るとどっちが子供なのか見分けがつかない。

文部省（現文部科学省）の担当官は視察した際に「昔はたくさんいた、根は優しいけどおっちゃん近所のおじさん」という言葉を残している。これがすべてを物語っている。そして、おっちゃんたちの情熱はまだまだ冷めそうにない。

尾上町蔵保存利活用促進会

農家蔵保存利活用と
グリーンツーリズム振興

常務理事

佐藤正彦

尾上町は、他市町村にない農村景観が評価され、農村アメニティコンクール優秀賞、農村景観百選、かおり風景百選指定の町として、全国的に広く知られている。その農村景観を形成しているのが、蔵、庭園、生け垣である。

農産物貯蔵の役目を
終えた三百三十四棟

特に蔵は町内に三百三十四棟が現存し、その九四％が農家蔵である。昭和二十―三十年代に建造ブームが起り、



蔵フォーラム

の間にもステータスという価値観が薄れていった。当町で生まれ育ち、暮らしていると「素晴らしい蔵、蔵並み、農村景観は見慣れた風景」でしかなくなつた。

蔵を建てる人、建てる職人がいない今日、町にある蔵は少なくなつても多くなることはない。後世に残すべき建造物・文化遺産と位置付けし、「蔵保存と利活用の促進、グリーンツーリズム事業推進基盤確立と事業の定着」を目的に、町内外賛同者二十六人で平成十四年一月に「尾上町蔵保存利活用促進会」を設立。翌十五年八月、NPO法人の認証を受け、法人組織とし

主に農産物の貯蔵施設として活用されてきた。当時、蔵は所有者のステータスでもあった。昨今、農産物は収穫と同時に農協の貯蔵施設に搬入という農業形態の変化に伴い、蔵は貯蔵施設の役目を終え、物置蔵となった。次第に所有者にも、地域住民

で活動している。

活動内容は、①蔵の合同調査②蔵マップ発刊③会報「蔵ジャーナル」発刊④蔵フォーラムの開催⑤蔵並み図画コンクールの開催⑥蔵・農家庭園ウォッチングの開催⑦修学旅行農作業体験ファームステイの受け入れ⑧ブドウ・リンゴ・イチゴ収穫体験の開催⑨古農具収集および展示⑩地域案内育成講座の開催⑪蔵の文化財指定登録調査⑫蔵保存と利活用への提言」などに及ぶ。

その活動が各新聞社に掲載され、またNHKの「東北各駅停車」や民放テレビ番組などで大きく取り上げられた。国の垂柳・猿賀田園空間整備事業蔵利活用拠点づくりに採択され、さらに全国農業高校教科書「グリーンライフ」への掲載、同十五年度「ふるさとづくり賞」振興奨励賞や第三回「村の伝統文化顕彰」農村振興局長賞の受賞。そして同十六年度あおり活性化大賞奨励賞と同地域づくり総務大臣賞の受賞など、大きな成果となり、蔵所有者をはじめ地域住民の意識高揚につながった。

広域連携による

農村文化のまちづくり

この成果は弘前市、岩木町、平賀町、浪岡町、当町の連携による、グリーンツーリズム事業の推進組織

「広域連携：津軽ほつとステイネットワーク」設立（平成十五年二月）の原動力となった。そして同十六年五月、千葉県船橋市立二宮中学校三年生三百三十八人の修学旅行農作業体験ファームステイを受け入れし、「感動のファームステイ」を実現。十七年度は同校の受け入れ（五月下旬）と小樽市内二中学校の受け入れ（六月上旬）が確定し、広域的なグリーンツーリズム事業推進の基盤確立と事業定着の拡充に大きく貢献する。

当会の活動が短期間に大きな成果を上げた要因は、農家蔵という素材の良さと弘前大学や八戸工業大学、それに柏木農業高校や地元小学校などの教育機関、県内のNPO法人、グリーンツーリズム推進団体や県行政など、多方面にわたる連携が大きな推進力となっている。

「農家蔵の町」「グリーンツーリズムの町」という全国ブランドの確立、農村文化の漂うまちづくり実現に向け、今後も人材育成と受け入れ農家の啓蒙、蔵利活用の拠点づくり促進、蔵の補修工事・蔵並みの環境整備推進、蔵文化財の指定登録調査推進と登録申請、グリーンツーリズム事業の定着・拡充などを積極的に展開していく方針である。

あじ島冒険楽校

島の高齢者に生きがいもたらす異世代交流体験



網地島地区モデル・コミュニティ推進協議会

副会長 ● 桶谷 敦

「コンセプトは『昔の夏休み』の体験」

宮城県牡鹿町の網地島は、人口約五百五十人、六十五歳以上の高齢者の割合が約七割を占める。平成十二年三月に小中学校がなくなり、今では元気な子供の声がほとんど聞こえない、人口の流出と高齢化の問題を抱えた島である。活気ある地域づくりのために、何かできることはないかと島のみんなで考え、実施したのが子供の体験学習「あじ島冒険楽校」である。あじ島冒険楽校は、網地島の自然と島の人々の技を活かした、手作りの楽校でもある。

「閉校施設をリニューアルして再利用」

平成十六年七月から八月にかけて、ウニ、アワビ、ホヤの三コースを開催し、宮城県内の約百人の子供

たちを受け入れた。宿泊は閉校した中学校をリニューアルした「島の楽校」だ。体験したメニューはシーカヤック、肝だめし、流木を使ったクラフト作り、あじ島冒険楽校のロゴを入れたTシャツ作り、植物観察、



「島の楽校」の前で

磯観察、島の伝統技法による魚釣り、バクダン（お米をポップコーンのようにふくらませた菓子作り。昔の祭りでは、子供たちに人気があった）など、盛りだくさんな内容になった。

楽しみの食事は、コースの名前の通り、取れたてのウニやアワビにみんな大満足。魚釣りでは、多くの子供たちが生まれて初めてにもかかわらず、ほとんど全員が魚を釣り上げた。さっそく浜辺で焼いて全部食べた。

また、四キロ離れた牡鹿町鮎川の「鯨祭り」の花火を、島の高

齢者が子供のころにしたのと同じように、港の岸壁にゴザを敷き寝っころびながら見た。どれをとっても、貴重な体験になった。

「冒険楽校を支える応援団と元氣を取り戻した高齢者」

冒険楽校では、NPO法人宮城県インストラクター協会などと協働で、流木を使ったクラフト作りなど、体験メニューの開発を行った。また、三十五年前に網地島の網長中学校に赴任し、島の植物を研究した高橋和吉先生にも参加いただき、島特有の植物について、興味深い話を聞いた。さらに、冒険楽校のスタッフとしても大学生のリーダーにサポートしても



いしどの浜で魚釣り

らい、冒険楽校の応援団の輪が一段と広がった。

活気を失い暗くなりがちな網地島を、冒険楽校の子供たちの大きな歓声で明るくすることができた。島の高齢者も子供たちを見ると、積極的に「どこから来たの?」「船に酔わなかったかい?」などの言葉を掛け、島ではめったに見かけない子供との交流を楽しんだ。島の高齢者は子供たちから大きな元氣をもらい、冒険楽校の取り組みに自信を深め、生きがいを見いだすことができた。また、子供たちにとっても、島で過ごした夏休みが一生忘れられない思い出になったようだ。

小国町黒沢峠敷石道保存会

文化遺産を復元し
地域の観光資源に活用

会長 ● 保科 充

黒沢峠敷石道保存会は、越後街道十三峠の一つである黒沢峠の敷石道を復元し、次代に引き継いでいくために、黒沢地区の全戸（十九戸）で構成している歴史街道保存を目的とした仲間の集まりである。

小国町は、山形県の西南端、新潟県境に位置している。越後（新潟）と置賜（米沢）を結ぶ旧越後街道沿い、荒川とその支流域に開けた町で、面積は七百三十七平方キロ。山形県総面積の七・九%に当たる町土の九四・八%が山林で占められている。

埋もれていた町の財産

旧越後街道は、上杉藩時代に交易のために整備された道である。この街道には十三の非常に険しくぬかるんだ峠があり、これが越後街道十三

峠と呼ばれていた。当町にはそのうち十の峠があり、黒沢峠もその一つである。幕末、牛馬が往来しやすいよう、石を切り出して敷いたとされる。

歴史にかんがみると、薩長の軍隊を越後で出迎えた米沢藩士や、英国の女性旅行家イザベラ・バードも通った道だが、明治以後は山形県令三島通庸による小国新道（現在の国道一一三号）開設に伴って、街道は次第に忘れ去られていった。

住民の手による

発掘と復元整備

長年の風雪にさらされ、落葉や土が幾層にも重なった峠道は、ほぼ埋もれた状態にあった。そのため昭和五十五年六月に保存会を発足させ、敷石道の復元を試みたのである。われわれにとって、黒沢峠の敷石の存在自体は、山菜採りなどの経験から

知っていたが、同年九月、山形県による調査の結果、敷石が当時のまま残っていることが正式に確認された。これを受け、行政や有識者、ボランティアの協力を得て数回にわたる発掘作業を行い、翌年度には全体を掘り起こすことができた。

二・七キロほどの峠に、確認された敷石は約三千六百段。ルートを探しながらの作業は容易ではなかったが、一段一段、丁寧に掘り出し、次第に姿を現す。悠久の道“は、ブナ林の中でひっそりと輝いていた。先人たちの苦勞がしのばれる景観である。同五十七年には、その文化的価値が認められ、町指定文化財として登録された。

「歴史街道の環づくり」実現へ

黒沢峠は、新緑や紅葉など四季を通じて趣がある。その敷石道は、文化遺産であると同時に、優れた観光資源である。十月下旬に開催する「黒沢峠まつり」は、町内外から二百人を超える交流者が訪れて峠を散策



黒沢峠整備

し、その後、もちつきや焼肉、丸太切り大会など、地元住民との交流を深めている。平成十六年度で十八回を数え、リピーターも多く好評を得ている。

保存会の主な活動は、草刈りや補修、案内板設置である。ほかにも歴史研究やパンフレット発行、ホームページを活用したPRに加え、要請があればガイドも行なっている。全体での活動は月一回ほどだが、もともと全戸が会員のため、個人が山仕事の間際に敷石道を補修したり、草刈りを行ったりしている。集落での生活自体が保存活動とつながっており、自ら積極的に地域づくりにかかわる意識が根付いてきている。

近年、他の峠でも住民団体が組織され、旧越後街道を復元する動きが広がっており、黒沢峠と同様の敷石が確認された峠もある。私たちの活動が、市町村の枠を超えて広がればと願っている。

東京ベイ・クリーンアップ大作戦実行委員会

「泳げる東京湾」目指し

住民・団体が清掃活動を展開



（財）港区スポーツふれあい文化健康財団
コミュニティ文化健康部事業課

● 小野口敬一

「東京港を泳げる海に!」「お台場の海をきれいにしたい」という思いから、全日本潜水連盟、東京海上保安部が平成八年六月に始めた事業が「東京ベイ・クリーンアップ大作戦」である。その後多くの地元住民、地元企業・団体を取り込み、同十六年度は三回（六月、九月、十一月）実施した。毎回多くの参加者を集め、今ではお台場の風物詩となっている。

それぞれの団体が持てる能力（人を出したり、お金を出したり）を生かしながら、活動を続けている。例えば、東京海上保安部はダイバーの安全のため、特殊救難隊を派遣している。全日本潜水連盟はダイバーへの周知と、当日の海中清掃の運営のお手伝いをしている。（株）サニクリーンは毎年、ゴミ袋を提供してくれる。（財）港区スポーツふれあい文化健康財

団は、事務局を担当している。

このように東京ベイ・クリーンアップ大作戦実行委員会は、全日本潜水連盟、東京海上保安部、東京都港湾局、東京都水産試験場、臨海副都心まちづくり協議会、（社）東京青年会議所港区委員会、デックス東京ビーチ、港区など、さまざまな団体により組織された実行委員会である。

活動資金については、全て企業・団体からの寄付浄財により運営している。清掃用品（軍手、火バサミ、ふるい、スコップなど）はすべて、この寄付浄財により購入している。毎回、清掃終了後に水洗い



海中清掃には総勢151人が参加

をして保存しているため、ほとんど買い足すことなく、長い間同じ物を利用している。また、他の団体が清掃活動をしたという時には、用品の貸し出しもしている。

水質浄化が実り 潮干狩りが復活

このような活動を継続しているうちに、多くの新たな活動が生まれた。例えば、臨海副都心まちづくり協議会が中心となり、昨年六月のクリーンアップ時に海浜清掃だけではなく、お台場の陸地部分の清掃も実施した。また、全日本潜水連盟が中心となり東京港水中生物研究会が設立され、東京港の水中生物の保護・観察を長年行っている。一方、地域での清掃ボランティアも生まれ、回収するゴミの量は年々減少してきている。

そこで私たちは、ただ単に当日のゴミを清掃するだけではなく、もっとより積極的に海をきれいにしようという思いから、お台場地域の港陽小・中学校に協力を依頼し、

砂浜を掘り起こして地中に酸素を供給したり、アサリの稚貝を放流することにより、水生生物を増殖させ、水質を浄化する試みも行っている。昨年お台場海浜公園では、週末に多くの人が潮干狩りをするほどアサリが繁殖した。

より安全な水遊びができる環境に

東京都は平成十五年六月、環境局、港湾局、下水道局の三局が合同して、お台場海浜公園に有明から海水をくみ上げ、ろ過・殺菌してお台場海浜公園の海に流す「海域浄化実験プラント」を完成させた。これにより、より安全に水遊びができる環境が整った。

今後も地元住民、地元企業・団体が「三位一体」となり、環境の保全を呼び掛け、活動を続けていきたいと考えている。具体的には、これまで活動の中心となっていた全日本潜水連盟が主体となり、親子シュノーケリング教室を予定している。平成八年六月に活動を始めてから今年で十回目となる節目の年に、いよいよ「東京湾を泳げる海に!」という当初の目的が実現されようとしている。

※年三回のうち、六月は実行委員会、九月は連合みなと、十一月はサントリイ（株）が中心となって実施している。

小田原銀座商店会

人が行き交う交流の場を 復活した商店街



会長 ● 角田克宏

地域住民との絆を築いた 街かどギャラリ

小田原銀座商店会は、「人びとのふれあい・コミュニケーションの場の確立」をテーマとして、さまざまな活動を展開してきた。平成十五年七月にスタートした「街かどギャラリ」は、普段見落としがちな商店街の魅力を紹介し、その風情を楽しんでいただく「街歩き」と組み合わせ、その作品を商店街の六画廊が協力し合っ

て企画展示し、地域住民との新たな絆を築いている。その一環として、教育コミッション事業を展開、同年のクリスマスでは市内の小学生



小学生の描いた商店街フラッグ

や幼児絵画教室の生徒たちに、フラッグ絵を描いてもらってアーケードに飾り、華やかな彩りを添えていただいた。

同年十一月にオープンした「銀座情報プラザ」は、地域の人も気軽に立ち寄れる

フリースペースと、体験的に販売を始めることのできるレンタルボックスを組み合わせて、今では商店街と外部をつなぐ拠点として機能している。

こうした事業の



銀座情報プラザ。レンタルボックスにさまざまな商品が並ぶ

きっかけは、十五年に小田原市が募集した「中心市街地活性化事業費補助金」への応募だった。当市においても他の多くの都市と変わりなく、ここ十数年は経済的地盤の沈下に悩んできた。かつて郊外に誘致したさまざまな工場群が経済構造の変化に伴って事業の撤退・縮小を余儀なくされ、その跡地に大型商業施設が進出し、多くの人を集めている。

こうした流れの中で、私たち中心市街地の商業者が活性化を図るため、この地ならではの魅力を再発見していく必要が生じてきた。さまざまな議論を重ねていくうちに、

①古くからの交通の拠点としての独自の立地②歴史や伝統に裏付けられた専門店街と風情——といった大きな特徴が浮かび上がってきた。こうして生まれたテーマが「人びとのふれあい・コミュニケーションの場の確立」だった。

人の流れを戻した 高校生チャレンジショップ

銀座情報プラザや街かどギャラリ

ーなどの事業を進めながら、私たちと事業者の思いがマッチングした例が「高校生チャレンジショップ」である。同年七月、商業高校の神奈川県立小田原城東高校から、学習成果の実践の場の提供を求められた時、当時展開を考えていた教育コミッション事業にぴったりとはまり、協力を応諾した。

その後、先生と生徒たちの努力のかけがえがあり、市の「起業戦略プランコンテンツ」で特別賞をいただき、空き店舗のオーナーの協力も得て、翌十六年四月に無事オープンさせることができた。その後、全国初の高校生による通年営業の店舗は当初の予想を大きく超える売り上げを記録し、中心市街地に新たな人の流れをつくり出している。

こうした事業を通じて私たちは今、さまざまな人びととのネットワークを育みつつある。銀座情報プラザをサポートしてくださるボランティア、街かどギャラリを通じて知り合った絵画愛好家たち、高校生チャレンジショップの生徒たちから、新たな事業展開のヒントをいただいている。こうした情報とネットワークを通じて、にぎわいある商店街、そして魅力あふれる地域づくりを今後目指していきたいと願っている。

新潟県十日町地域広域事務組合

現代アートを素材にした
広域連携の地域づくり

事務局企画振興課長

● 尾身晴夫

越後妻有地域は、本年四月一日に五市町村（十日町市、川西町、中里村、松代町、松之山町）が合併した十日町市と、津南町の二市町からなる面積七百六十二平方キロの中山間地である。豊かで美しい里山などの自然環境に恵まれた日本有数の豪雪地の中に、農業と織物業を主産業に八万人弱の人が暮らしている。

越後妻有アートネットワーク
整備事業をスタート

地場産業の低迷と少子高齢化や過疎化が進み、地域活性化の起爆剤として新潟県とのパートナーシップの下で、現代アートと環境を素材に「越後妻有アートネットワーク整備事業」に取り組むこととした。「人間は自然に内包される」という基本精神に基づき、地域の活性化、地域の情報発信、交流人口の増加を目指

し、アート分野の専門家によるコーディネート制による「ステキ発見」「花の道」「ステージ整備」「大地の芸術祭」の四つを柱に位置付け、事業をスタートした。

世界に情報発信する
「大地の芸術祭」

平成八年から十日町地域広域事務組合に企画振興課を置き、事業の事務局とした。中でも「大地の芸術祭」は、四つの柱の中核を成し、全世界への情報発信と交流人口の増加を目指す野外イベントである。三年に一度、自然とア

ートと人間の融合を図ることを目的に、同十二年に第一回を開始した。

夏休みを含む五十三日間にわたって開催し、三十二カ国百四十七組の

越後松之山「森の学校」キョロロ



アーティストが圏域内の田畑や神社、空き家や商店街などに作品を展開、十六万三千人の来訪客を記録した。第二回は同十五年の夏に五十日間開催し、二十三カ国百五十七組のアーティストの参加と三つの新しいステージが完成、五十を超える集落の参加により、二十万人を超える訪問客を数えた。

第一回は現代アートに対する嫌悪や公的資金投入への批判など、取り組みは順風満帆に行われたわけではなかった。しかし、

数多くのマスコミがこのイベントを取り上げてくれた上、大学生などの若い人が数多く来訪した。また、首都圏の学生を中心としたボランティア「こへび隊」が企画運営に参加し、地域住民との協働作業が数多く行われたことが評価された。

ボランティア学生と地元
芽生え始めた交流

第二回は商工会議所や数多くの集落にも理解され、第一回を上回る盛

WhiteBase/夜のアートイベント



が地域の祭りなどに参加し、集落・商店街との新たな交流が芽生え始めている。

「ホップ、ステップ、ジャンプ」——第三回の平成十八年はジャンプの年であり、過去二回を上回るイベントとするため、準備を進めている。既存作品の有効活用と夏季プログラムの開催、受け入れシステムの構築や個性ある商品開発、廃屋など地域資産の有効活用などを目玉に、第三回を目指す計画である。また、中越地震で深い痛みを受けた地域や住民が、震災復興へ向け元気で頑張っている姿を国内外に発信できるよう、第三回目の年を復興元年と位置付け、協働による地域づくりに取り組んでいきたいと考えている。

富山県南砺市

合掌文化村で進められた 演劇による地域づくり



市長公室次長

● 中谷信一

南砺市は、平成十六年十一月一日に八町村が合併して、新たに誕生した市である。本市は、富山県の南西端に位置し、東西二十六キロ、南北三十九キロ、面積六百七十平方キロを有し、うち約八割が白山国立公園を含む森林地帯、それに岐阜県境に連なる山々に源を発する庄川、小矢部川の急流河川が北流して富山湾に注ぎ込む、豊かな自然に恵まれている。市の最東南端、八尾町、岐阜県境に接する山深い地に利賀地域（旧利賀村）が位置している。

過疎化対策の 合掌文化村構想

昭和五十一年二月、早稲田小劇場（後にSCOTと

改称）主催者鈴木忠志氏が豪雪の村を訪れた。当時、村では深刻化する過疎化現象の歯止め策として、「合掌文化村」構想を打ち出し、合掌家屋の移築を進めていた。この合掌家屋を見た鈴木氏は「重厚な合掌造りは演劇創造の理想空間」と称賛し、活動の本拠地を東京から利賀へと移し、劇団員と共に活動を開始した。同五十七年、村では六度目の新年を迎えた鈴木氏が、世界演劇祭の構想を村に打ち明けた。「一劇団



利賀芸術公園「野外劇場」

活動を開始した。同五十七年、村では六度目の新年を迎えた鈴木氏が、世界演劇祭の構想を村に打ち明けた。「一劇団



中央が「瞑想の館」、右が「瞑想美の館」

の活動にとどまらず、利賀村から広く世界に通用する芸術・文化の発信を」という趣旨は願ってもないことだったが、村はおろか、わが国初の試みであった。

日本初の世界演劇祭を開催

そして夏、「利賀フェスティバル'82」第一回世界演劇祭in富山」が開幕。米国、英国、ポーランド、インド、ブータン、日本の六カ国から十二劇団が参加し、国内はもとより世界から一万三千人の観客が訪れた。成功裏のうちに終了し、村民にこの上ない満足感と、辺りな地でもこれだけの国際的イベントができるという大きな自信、誇りを与えてくれた。

以来「世界は日本だけではない。日本は東京だけではない。この利賀村で世界に出会う」——この世界演劇祭のスローガンの下に、舞台芸術活動は今日も進化しながら継続されるとともに、以後の村おこしの基本的な姿勢にもなっている。都市交流、世界演劇祭、利賀そば祭り、そばの郷、瞑想の郷などの拠点施設整備、国際交流などの利賀の看板イベント、施設などは今もにぎわいをみせている。

わが国の「舞台芸術の メッカ」に

平成六年七月、新利賀山房の完成を機に、劇場などの県立化や通年利用化が検討され、合掌文化村一帯が県立の芸術公園として位置付けられた。才能ある若手演出家の支援、育成に主眼を置いた「サマー・アーツ・プログラム」の開催、日本、中国、韓国三カ国の共同による「Be Se To」演劇祭が盛大に開催され、今日では、舞台芸術のメッカ「聖地」とも言われている。旧利賀村で行われてきた舞台芸術活動は、南砺市にとっても極めて大切な芸術・文化活動であり、地域の活性化やイメージアップにも有効かつ効果的なことから、今後も積極的な取り組みが期待されている。

大杉ミュージカルシアター

オリジナルミュージカル
上演で地域を活性化

主宰 ● ガート・T・ウエスタハウト



執筆者 ● 林 清乃

平成十六年十月、大杉ミュージカルシアター第十回定期公演「よくばり天狗 パートⅡ もどったぞー!」を、小松市大杉町の大杉中町劇場で上演した。さかのぼること十年、同七年四月に大杉ミュージカルシアター（以下OMT）は結成された。「質の高い演劇を安価で提供しよう」

地域に伝わる民話・昔話で作品を創作

「自分たちでできることは自分たちでやろう」と、OMTの主宰者でもあり脚本、演出、作詞、作曲などをこなすガート・T・ウエスタハウトの下に約四十人の有志が集った。これがOMTの始まりである。

作品はすべてオリジナルである。

例えば、大杉町にある天狗の像を見て、メンバーの一人が言った。「この天狗さんになんかお話でもないのかね」「それなら話を作ればいいんだ!」と、ガートは「よくばり天狗」という作品を生み出した。このように、地域の面白いものや民話・昔話、そして狂言の話や落語などを基にして、家族みんなで楽しめるオリジナルミュージカルを創作している。

現在、メンバーは約四十人である。

OMTの舞台には、必ずといっていいほど観客のみなさんに参加していただく場面がある。これにより、演じる側も観る側も緊張が解け、舞台が一層盛り



ラジオ大杉（2000年）

理解と応援がなければなかったと言える。これからは、まだOMTの舞台を見たことがない人にも見に来ていただけるような、そして私も参加したいと思ってもらえるような、楽しい作品を作っていきたいと思う。



大杉中町劇場（小松市）

上がる。舞台をみんなで作る楽しさをその場にしているみんなで分かち合う。これも小さな劇場のアットホームな雰囲気だからこそ、存分に味わえるのではないだろうか。

お祭り騒ぎが過疎地に
にぎわいを

私たちのホームシアター「大杉中町劇場」は、大杉中町公民館である。大杉町は過疎化が進み、公民館もほとんど使われずにいたが、町の好意により、ここを劇場とすることができた。定期公演は、週末を利用した五日間で計十回公演を行い、およそ千人の観客を動員する。普段は静かな町がこの時ばかりは、お祭り騒ぎだ。町のおじいちゃんやおばあちゃんも孫を連れて見に来てくれる。今回の受賞は、町の住民をはじめOMTの活動にかかわるすべての人々の

天龍村柚餅子生産者組合

過疎地に伝わる食文化を 活かした地域おこし



組合長 ● 関 京子

それは、オイルショックの波がこの山奥にも及び、豊かだった山村の暮らしが下向きになり、都会に出て行く人は増え、主婦まで働きに出るようになったところである。畑は荒れ、



かくれた里左側。右下に天龍川

いつかお袋の味も忘れられてしまうのではないかと不安を感じるようになっていた矢先、若い主婦こそ家庭を守り、野菜くらは自分で育てて、地域にしっかり根を下ろしていかうと、生活改善グループ「あゆみ会」を結成した。当時十人の若妻で始めた活動である。

武士の携帯食として 作られた柚餅子

昭和四十八年、村の「暮らしの総合展示会」があり、そこに「柚餅子」が展示された。一見したところ、こげ茶色の塊で、見た目も良くなかったのだが、薄く切ってそれを口に運んだ時、なんとも上品な香りが口の中いっぱいになり、深い感動を覚えた。それは、宝物が実は自分の足元にたくさんあることに気付かされたことでもあった。そして、こうし

た宝物を次の世代に伝承していくことが、私たちの責任なのだと感じるようになった。

柚餅子は、古くは武士の携帯食として作られ、伝えられてきた

もので、いろいろの生活がなくなるのと同時に消えようとしていた。その作り方を教わり、「坂部の冬祭り」の客に出したことがきっかけになって、商品化に至ったのだった。

生産者組合と加工施設 が誕生・完成

まだ「村おこし」という言葉もないころ、まったく素人の私たちは、何からどう始めてよいのか分からず、とにかく夫婦で集まって、まずは希望者で始めようということになり、昭和五十年、組合員十五戸三十人で「天龍村柚餅子生産者組合」が誕生した。同五十一年には、保健所や農業普及所の指導の下に、特別農山村対策事業の補助を受け、加工施設ができ、大量生産ができるようになった。

物を売る経験もない若妻にとつて、行商のまね事から始めた販売活



柚餅子

動は、恥ずかしさもいっぱいで、弱気になりながらの毎日だった。大都市で行われる物産展に参加しても、経費割れでなかなか利益を上げることができなかった。地元で取れる原料で、柚餅子以外の健康によい安全な食べ物の新製品を作ったが、なかなかうまくはいかなかった。

地域の歴史・文化と セットで販売へ

そんな時、これまでの販売活動を見直し、こちらから出かけるのではなく、客にここに来ていただくことを考え、いろいろな勉強会に参加して、情報交換をしてきた。幸いにもここは歴史的にも古く、毎年一月の「坂部の冬祭り」は国の重要無形民俗文化財にも指定されており、「熊谷家伝記」「関伝記」などの歴史的民俗学的な資料も数多く残る、歴史と文化の土地でもある。

携帯電話もつながらない不便な所だが、この地を訪れ、八十歳を超すおばあちゃんが生涯現役で働いている姿に感動して帰る人が少なくない。今回、このような賞をいただいたのもこれまでの活動が評価されたことと組合員一同、喜んでいる。

大道芸ワールドカップ実行委員会

大道芸で「世界の静岡」をPRへ



実行委員長

● 杉山 元

行政と青年会議所の コラボレーションに出発点

「大道芸ワールドカップin静岡」は今から十三年前、一九九二年に誕生した。もともとこの静岡の地には歴史をさかのぼっても「大道芸」という文化は存在していなかった。ではなぜ？ それはバブル終盤期、地方の時代と言われた潮流の中で、市の新しいアイデンティティーを見いだしたかった行政と、まちの活性化に尽力していた市民組織である青年会議所とのコラボレーション中に、その出発点を見いだすことができる。静岡市第七次総合計画「人の集まるまちづくり」をテーマに、市制百周年記念事業であった「静岡市駿府博覧会」



モダンダンス（「大道芸ワールドカップin静岡2004フォトコンテスト」特選）

「静岡市駿府博覧会」の余剰金を基金とした、斬新かつオリジナリティーあふれる新規イベント、それが当時の市長も大変関心のあった大道芸だったのだ。発案から十五年、昨年の第十三回大会では、初めて来場者が二百万人の大台に乗り、過去最高となる二百九万人を記録した。十三回の累計では約二百二十万人、平均百六十万前後の来場者をいただくまでに成長した。その間、来静したパフォーマー数は延べ七百組近くになる。外国人パフォーマーも約二百三十組に上る。

その結果、当初の目的であった、「人の集まることによる経済効果とまちの活性化」「大道芸と触れ合うこと

による市民の文化意識の向上」「世界各国の文化が集うことによる国際化」「各国から訪れるパフォーマーと来静者による静岡のPRと世界への情報発信」「市民と企業と行政が三位一体となったまちづくりへの参加意識の高揚」がはつきりと現実化してきている。

こと大道芸というジャンルでは、世界から見た時、日本では東京でも大阪でも名古屋、横浜でもない「静岡が中心になっている」と自負している。それは最近まだ少数ではあるが、外国人パフォーマーが自費でも出演したいという申し込みの増加に見ることができ



ボランティアによるワンポイントメイク

されたいと頑張っている。毎年毎年わずかずつではあるが、市民文化としてこの大道芸が確実に定着してきているのを感じずにはいられない。

静岡の大道芸は、ヨーロッパ数百年の歴史文化と比べれば、まだまだ始まったばかりである。これから「ソフト手法による一過性のイベント」としてではなく、しっかりと静岡の「文化」として定着させていかなければ本来の意味はない。それゆえに、このイベントを陰に日なたに支えてくれている一般市民ボランティア一人一人のパワーが、ますます大切になってくると思われる。

一般市民ボランティアのパワーと情熱が、今後も間違いなくこのイベントを進化させ、まちを活性化させていくだろうと思っている。いつの日か、静岡市の姉妹都市カンヌが「映画祭といえばカンヌ」と世界中に認知されているように、必ずや「大道芸といえば静岡」と認知されるようになる。私たち実行委員は信じている。その日が来るまで、ボランティアとしての「All for you. It's my pleasure」という心意気は決して変わることはない。

市民文化として定着、 まち活性化に貢献

そういえば昨年、静岡出身のパフォーマーが公式デビュー、大好評を博した。市内高校生の中にも、週末街頭でパフォーマーをやる者が何人かいて、将来この大会に公式招待

三重県鳥羽市

観光地の再興を目指し 「地球塾」で人材育成へ



地球塾運営委員会
委員長 ● 奥野和宏

「真珠王・御木本幸吉の ふるさと「鳥羽」」

ご存知だろうか、真珠の計量単位が国際的に「匁」であることを。鳥羽で生まれた御木本幸吉が、真珠養殖を成功させ、日本の真珠が世界的評価を得るとともに、「匁」が全世界共通の単位となったのだ。

昭和四年、当時のウィルソン前米大統領のエディス夫人が鳥羽を訪れた時、「真珠は月のしずくの結晶と言いますが、まさにその通りの美しさですね」と感嘆すると、「いいえ、私の作る真珠は人の涙の結晶です」と答えた幸吉。伊勢神宮に行幸した明治天皇に、「世界中の女性の首を真珠でしめてごらんにいれます」とも言っていた。真珠の養殖に明け暮れた幸吉だったが、いつもお気に入りの地球儀を手元に置きながら、

「俺は毎日、世界中を飛び回っているのだ」と楽しげに話したという。鳥羽にいながら世界に思いをはせた真珠王・御木本幸吉。「地球塾」は、幸吉が残した言葉をテーマに、鳥羽の未来を考える人材育成講座として誕生した。

「郷土の偉人から 「もてなしの心構え」を学ぶ」

地球塾開講のきっかけは、観光地再興への願いだった。鳥羽市を含む



地球塾教科書

伊勢志摩地域は、自然景観や伊勢神宮など、一級の観光資源を持ちながらも、観光客の減少傾向が顕著になっていた。何とかしなければ。しかし、短絡的に集客を図ることよりも、まず「住む人が誇れる地域づくりを行う」ことが大切であり、そのために「地域づくりを行う人づくりが重要だ」との考えに至った。また三重県が実施した観光客アンケートから、「もてなしが悪い」、つまり「人」に大きな問題があるとの指摘も受けた。

そこで官民協働で「もてなしの力づくり検討会」を平成十三年五月に開催。議論白熱の中、地域ならではの特徴ある活動に取り組みようと、幸吉語録をもてなしの心に据え、郷土の偉人から人づくりの心構えを学ぶ地球塾が生まれたのである。とは言っても、決して堅苦しい講座ではない。ウィットに富んだ幸吉に倣い、楽しい活動にすることを目指し、市民が議論する場をつくることを心掛けた。幸吉語録がヒントに



二宮尊徳を訪ねて

なって、出航する船に別れを告げる「リメンバー赤いハンカチ」や、幸吉好物のうな井にちなんだ「どんぶり会」、小田原市民大学報徳塾との交流などが生まれた。赤いハンカチは、市民交流の必須アイテムとなってきた。

少年探偵団を結成し 世界に情報発信

子どもたちにも広げようと、鳥羽ゆかりの偉人を調べる鳥羽少年探偵団が結成された。江戸川乱歩の妻が鳥羽出身であることから、本家公認の探偵団が誕生。子どもたちの体当たり調査は、新発見の連続。調べたことが地域の貴重な資源の発掘につながり、広報などで市民に知らせ、毎年、多くの反響が事務局へ届いている。地球塾はまだ生まれただけだ。訪れる人々に、感動を提供できるホスピタリティ豊かな人材育成を目指したい。そして、小さな鳥羽から幸吉は世界を見ていたように、根気よく講座を続け、鳥羽から世界にさまざまなものを発信できる人材を育てていきたいと考えている。

三重県志摩市・あのりふぐ協議会

厳しい資源管理で 地域ブランドを確立



志摩市長・あのりふぐ協議会顧問

● 竹内千尋

志摩市は、三重県のほぼ中央、伊勢湾の入り口に突き出した志摩半島に位置し、平成十六年十月一日に旧志摩郡の五つの町が合併して誕生した新しい市である。志摩という地名は飛鳥時代より続く伝統ある地名であり、古くから「御食^{みけ}つ国」と呼ばれ、豊かな海の幸に恵まれた地域でもある。

今回、総務大臣表彰を受賞した「あのりふぐ協議会」は、漁業者と旅館、市役所などの関係者により構成されており、市を中心に水揚げされる天然トラフグを、「あのりふぐ」の名称でブランド化するために活動している。

全国有数の トラフグ漁場に成長

志摩市阿児町の安乗地区では、太平洋戦争以前からトラフグ漁が行わ



釣り上げられるあのりふぐ

れていたが、水揚げされるトラフグはわずかだった。そこで二十年ほど前から漁業者が、「トラフグを増やすには、どうすればよいのか？」と考え、漁を行う時期や漁法、小さいトラフグは水揚げしないなどの厳しい漁業制限を行うとともに、自分たちでお金を出し合って、稚魚の放流を行ってきた。その結果、平成元年

には安乗漁港だけで百五十トンに迫る空前の大豊漁となり、志摩の海は全国でも有数のトラフグ漁場に成長した。

当時は水揚げされるトラフグの多くが下関などへ出荷され、地元でトラフグを扱う店はほとんどなかったが、安乗地区を中心に、天然トラフグを新しい観光の目玉にしようとする旅館が徐々に増えた。相手側のブランドを付けて輸出するOEM（相手先商標）から、独自のPB（自家商標・プライベートブランド）への転換を選択した。

そして同十一年、漁業者と観光関係者が協力して伊勢神宮へトラフグを献納し、あのりふぐブランド化への第一歩が踏み出された。その後、関係者が多くの協議を重ね、現在では「あのりふぐ」として商標登録を行い、商標を使用できる店を協議会の認定店に限定している。

認定店では消費者に安心して、最高のあのりふぐを食べていただけるように、調理技術の向上などに努めている。こうした取り組みにより、

従来は旅館などにおいては、オフシーズンであった十月から三月までの冬のシーズンがトップシーズンとなり、中には従来より三倍も顧客を増やしたところもある。

食の地方分権化推進で 志摩をPRへ

漁業者だけでなく、直接客に料理を提供する旅館関係者も一体となった天然トラフグに対するこだわりの姿勢が、あのりふぐというブランドを支えており、全国から高い評価をいただいている。

今後もブランドを維持していくためには、トラフグの資源管理やトレイサビリティ（生産・流通の履歴管理）など、今まで以上に難しい課題が残されている。

フランスに見られるAOC（原産地呼称制度）などを参考に、食の地方分権をさらに進めていこうと考えている。的矢ガキ、伊勢エビ、アワビなど、志摩市にはまだまだ豊富な産品がある。合併を機会にさらに、地域全体のチームワークを大切にして、全国に志摩の海と人の素晴らし



認定店看板

さを知っていた
だくために頑張
つていく。「メ
イドイン 志摩」
で勝負である。

大山崎竹林ボランティア

天王山の竹林再生に活躍するシルバーボランティア

日本経済の成長で 拡大した放置竹林

約四十年前は、道路沿いに手入れされたタケノコ畑があり、春にはタケノコの収穫が盛んに行われていた。昨今は、道路沿いのタケノコ畑は宅地化され、町のシンボルである天王山は中腹まで竹やぶが広がり、放置林が多く見られる。これは大山崎町だけの現象ではないと思う。日本経済の高度成長に伴って、低収入の農業・林業から高収入の産業へ流出した若者の職業の選択にあると思う。また、一面には竹材の需要激減、安い輸入品、職人の高齢化も原因の一つだろう。



天王山の枯竹を整理



会長 ● 江下伝明

竹には、マダケ、ハチク、クロチク、モウソウチクなど多くの品種がある。天王山には、タケノコとして喜ばれるモウソウチクが多い。これは、歴史的に乙訓地区の農家がタケノコ、親竹の販売を大きな副収入源として、大事に栽培されてきたからである。これが、モウソウチクの旺盛な繁殖力により、他の樹木を駆逐してしまった今日の天王山には、手入れされていない竹林が多く見られる。

このような竹林を少しずつでも整備していこうと、町の指導の下に一九九七年（平成九年）十月に活動を始めた。そして、二〇〇一年十月からは町の手を離れて、純民間のボランティアとして活動



正月用青竹売り

を始めている。メンバーは約四十人で、堺、大阪、西宮、伊丹、宝塚、京都など、他市町村からの人が多く、年齢的にはシルバーがほとんどである。活動の期間は、十月から翌年の五月（八カ月間）、第二・四土曜日、午前九時から十二時（雨天決行）まで行っている。主な活動は、①竹林の不要竹の伐採と清掃②竹炭加工（不要竹処理を目的にリサイクルと趣味）③小・中学生（総合学習課程）の竹林の整備と伐採竹材を利用した工作物造り④竹材の加工・販売（正月用青竹の販売、家庭菜園用の竹材の供給）などを行っている。



卒業記念に竹ベンチを作っている中学生たち

天王山は、現在でも大事な場面に使われる代名詞である。多くの人が訪れており、その際、良いイメージを持っていただけの景色にして、感動を与えることができる。課題としては、のこぎり（電動・手動）、草刈機、なたなどの工具費、伐採竹の処理（含む運搬費用）、住民の理解、若年層の参加など山積しているが、竹林ボランティアのメンバーは何時も和気あいあいと快汗を楽しんで頑張っている。

感動を与える景色の 再現を目指す

天王山は、昭和三十年ごろまではマツタケがたくさん採れ（現在はほとんどない）、またタケノコの栽培地であったので、一部の年輩の人には他人が山に入ることに抵抗感があり、快く思っていない人がいたようだ。しかし、竹林ボランティアへの手入れ依頼は増えており、私たちの活動を理解している人が増えているのだと感じている。

雲雀丘山手緑化推進委員会

このまちに、新たな緑を
育て隊！ 伝え隊！

宝塚市雲雀丘山手緑化推進委員会委員長
Green Solutions 理事長 ● 篠原 悌三

（） 独自の・自発的な
地域緑化活動を展開

宝塚市の雲雀丘山手地区は、阪神地区郊外住宅の先駆けとして、自然との調和を重視して開発された歴史ある緑豊かな住宅地である。しかしながら、阪神・淡路大震災以降、二次開発が相次いで行われるようになり、環境や景観を支えてきた緑環境が急激に破壊された。当地区の自然環境を維持し、将来へ継承することが私たちの役目だと考え、「わが街の自然・文化・人を守り育む」活動を手づくりで継続して展開し、進化・発展させてきた。

地域のアイデンティティーを維持・継承し、「緑」を軸にした多種多様なアイデアを発現して、行政や外部の専門家をうまく活用しながら、老若男女を巻き込んで各種イベ

ントを開催するにとどまらず、さらに発展進化させていく姿は大変ユニークである。他の地域においても、汎用性のある自主的創造的活動だと評価されている。これまでの主な成果は、次の通り。

一、地域の歴史を振り返り、未来へ伝承するための書籍をボランティア出版（山手地区住民の学術研究の成果を地域の宝として地元が共有）

当山手地区大学院生の研究内容を基にボランティア出版し新旧住民の地域像の共有化に貢献。

二、まちづくりルール提案書に基づく地区計画・景観地域の制定（緑化活動の本格展開を想定して）



「歌をハモッテ植樹式」（緑の木陰の音楽会）

斜面地開発のあり方を示す規定や、緑地率、緑被率、緑視率の規定など、「山麓部住宅地のまちづくりルールのプロトタイプ」を築き上げた。その成果と実績が高く評価され、現在市内他地区へも波及・拡大中である。

三、多彩な緑化活動が地域づくり、コミュニティづくり、子育て、地域福祉に発展・進化

子供の緑の勉強会、緑の木陰の勉強会、緑の木陰の音楽会、老人ホームへ出前する植樹音楽会、桜並木の復活と新設、歌をハモッテ植樹式、木登りの樹わんぱく活動、地区の歴史の勉強会、緑の地区マップ、桜と野鳥の定点観測など、単なる緑化活動にとどまらず、

幾多の苦難

を乗り越えながら長期にわたって活動している。次代に継承すべく継続させてきた成果は高く評価され、この一年間だけでも総務大臣、NHK会長、読売新聞東京本社社長、兵庫県知事、宝塚市長などか

（） 東南アジア諸国で
植林支援活動を推進

ら数多くの表彰をいただき、各地からの視察や講演も受け入れてきた。

当活動は「緑を守る」から「緑を育てる」に発展させ、現在は「緑を楽しむ」段階を展開中である。今後は「緑を育てる人を育てる」活動に進化させ、一連の循環サイクルを確立させながら、質的・量的なスパラルアップを狙うとともに、「持続可能なシステム」の構築を図っていく。

なお、当グループの代表などが、当緑化活動と併行して東南アジア諸国へ海外植林の支援、教育支援の活動を行ってきた。昨年、NPO法人「Green Solutions」



「子供が主体の植樹式」（フィリピン・ルソン島）

を設立し、当地区活動で得たノウハウを波及拡大するため、国際的な展開を積極果敢に推進しており、海外植林支援をしながら、森を造った寒村を中心に小学校校舎百校分を建設寄贈する活動を展開中である。

「緑の恩返し」は「地球への恩返し」でもある。末長く見守っていたきたい。

浜田石見神楽社中連絡協議会

「神楽のまち浜田」の 地域イメージを確立



浜田市経済部商工観光課
観光係長 ● 篠原 修

篠原 修

島根県浜田市は、県西部に位置し日本海に面した約百六十二平方キロ、人口約四万六千人の海、山、川の自然に恵まれた水産都市である。

古くから県西部の政治、経済、文化の中心として発展、全国に十三ある特定第三種漁港の一つであり、水産物およびカーゴの物流拠点ともなっている。

地域文化を観光に 活かしたまちづくり

当市では、郷土芸能石見神楽が盛んで、地域文化を観光に活かしたまちづくりを進めている。その中心的役割を担っているのが、市内十二の神楽社中で構成された浜田石見神楽社中連絡協議会である。現在、会員数は約二百二十人。市内観光施設での定期上演をはじめ、国内外での公演、石見神楽体験事業への参画など、



全国公演へ向けた練習

市の観光PRと地域イメージ確立に大きく貢献している。

そもそも祭事的性格が強い石見神楽であるが、浜田地域では神社の祭りだけでなく、地域のイベントで必

ず舞われるほど、地域住民になく

はならないものとなっている。石見

神楽を担っている神楽社中は、集落

など地域ごとに存在し、活動もそれ

ぞれの社中が行うことが多い。この

ように、地域の需要には個々の社中

で対応できるもの

の、対応が困難な国

内外の大きなイベン

ト出演などに応える

ため、昭和五十六年、

市内十四の社中を構

成員とする浜田石見

神楽社中連絡協議会

が結成された。この

結成のきっかけとな

ったのは同四十五

年、大阪万国博覧会

における石見神楽の

出演である。

その後、石見神楽は全国的に知名

度が上がり、バブル期には全国各地

から出演依頼が一気に増えた。そう

なると、それまで郷土芸能にとどま

っていた石見神楽は、社中員はもと

より、地域住民に浜田市を代表する

観光資源であるとの認識を定着させ

るのに時間はかからなかった。

石見神楽を市の重要な

資源に位置付ける

協議会では、観光商品開発事業と



どんちっちタウン

して同五十九年から毎年、石見神楽カレンダーを作成・販売するなど、運営費の確保と観光PRおよび地域経済活性化に向けた積極的取り組みを行っている。また、地域住民も石見神楽をモチーフとした商品開発や商店街の活性化策に取り組んでいる。そして、行政も石見神楽を浜田市観光の重要な資源と位置付け、観光PRへの活用と近年では石見神楽体験事業の実施など、その振興に力を注いでいる。

浜田市では、石見神楽のはやしの音を幼児が「どんちっち」と表現することから、石見神楽の総称となっており、近年特産品のブランド化や新商品、まちづくりに「どんちっち」の言葉が活用されてきた。

このように今日、協議会の長年の努力が花開き、浜田市の知名度を上げるとともに「神楽のまち浜田」のイメージを定着させた。今後も地域住民が石見神楽に何らかのかかわりを持ち、浜田地域の活性化につながるよう市としてもサポートしていきたい。

うだつの土曜祭実行委員会

地元根付いた

“オンラインワン”商店を目指す

企画課書記 ● 村雲正敏

貞光町は、徳島県の中西部に位置し、清流吉野川に流れ込む貞光川の扇状地に開けた人口約六千人の町である。西日本第二の高峰剣山への最も近い登山口や、うだつの町並みなど恵まれた自然環境と文化資源を持ち、江戸時代から商業と交通の要衝として栄えてきた。

毎月第一土曜日に開催

この実行委員会は、貞光中央商店街に面した商店(設立時から十一人の会員)が主体となっており、経費や知恵を出し合いながらうだつの土曜祭を立ち上げ、平成十五年度からは商工会フリーマーケット委員会に所属し、毎月第一土曜日(午前十時から午後七時まで)の開催に活発的に活動している。

近年、商店街は景気の低迷に始まり大型店舗の参入、交通網の発達などにより、地元商店街で買い物をする客数が減少し、売り上げも伸び悩むなど、親しみの持てる商店街の時代ではなくなっている。そこで、「下火になっていく商店街を以前のように明るく活気あふれる商店街にしよう」「わが町の商店街には、全国的にも珍しい二層うだつの上がる町並みがあり、その地域特性を生か

魚特売会)、個々の店舗が活性化のためにオリジナル商品の開発・一店逸品(わが商店に逸品あり)を目指した味の市(手打ちうどん、団子、田楽、焼き鳥、手作りクッキーなど)を中心に、土曜祭を実施してきた。貞光の風土を生かし、その季節に応じた手作り温かみのある看板や装飾品などで貞光中央商店街を飾り付け、まちかどイベント(コンサート、ライブ、回り踊り、あい染め体験など)を通じて、地元住民が親しみの持てる町づくりを目指し、商店街の活性化に努めている。現在まで継続してうだつの土曜祭を開催してきたが、回数を増すごとに客数、フ



うだつの土曜祭

リーマーケット出店数が徐々に増加し、地元住民の間でも土曜祭が浸透してきたところである。

地域住民の「コミュニティの場」に

また、地元住民がボランティアで土曜祭に参加するなど広がりを見せてきており、フリーマーケットやイベントなどで地域住民との触れ合いが生まれ、子供たちからお年寄りまで幅広い年齢層の交流が図られる地域住民のコミュニティの場となっている。平成十六年六月から、木綿麻倶楽部(文化ボランティア団体)がこれまで実施してきた映画祭をうだつの土曜祭に合わせて開き、イベントを同時開催することにより、うだつの町並みという地域特性をより一層生かした形での活性化を図っている。

今後、この貞光うだつの土曜祭を継続し、地域住民の認知度を上げるとともに、貞光町全体の地域イメージの向上を目指していきたいと考えている。同時に地元住民の声を取り入れて戦術を練り直し、規模の拡大を図り、全国のどこにもない「ONLY ONE商店」に向けて、地域全体の活性化、個々の店舗の活性化、一店逸品の確立を図り、地元根付いた商店街の再興に取り組んでいきたい。



夫婦で行われるあのりふぐ漁

三重県志摩市・あのりふぐ協議会／三重県志摩市 ●地域振興部門 (p18)



少年探偵団の活動



小学生に紙芝居

三重県鳥羽市「地球塾」●地域振興部門 (p17)

平成16年度 地域づくり総務大臣表彰



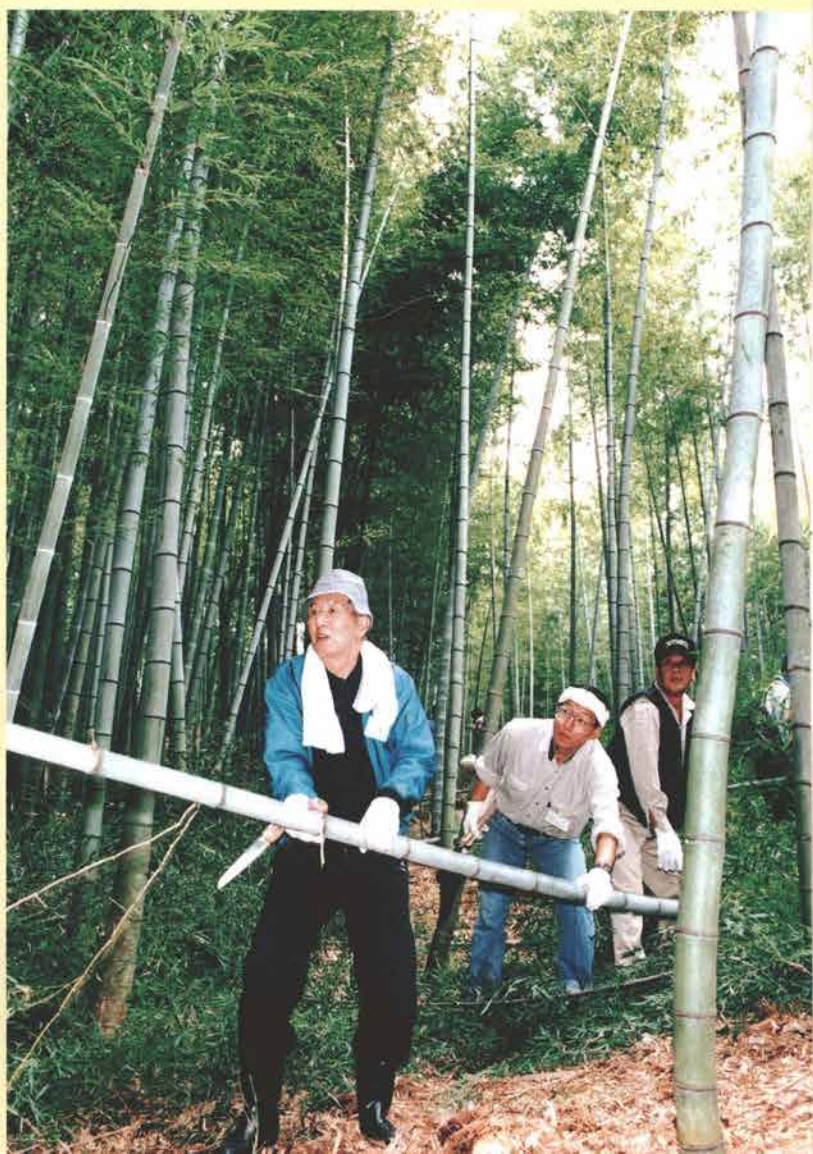
大道芸ワールドカップ実行委員会／静岡市 ●地域振興部門 (p16)
仮面のパフォーマー(「大道芸ワールドカップin静岡2004フォトコンテスト」入選)



子供の緑の勉強会

雲雀丘山手緑化推進委員会／兵庫県宝塚市 ●地域振興部門 (p20)

大山崎竹林ボランティア／京都府大山崎町 ●地域振興部門 (p19)
協同作業で行う不要竹の伐採と清掃





アイアンマンジャパン

長崎県五島市 ●地域振興部門 (p28)



宮崎県西米良村

●地域振興部門

(p29)



広島県蒲刈町(現 呉市) ●国際化部門 (p35)



TINの会/茨城県つくば市 ●国際化部門 (p31)



浜田石見神社中連絡協議会/島根県浜田市 ●地域振興部門 (p21) 島根ニューヨーク文化展石見神楽公演(平成3年)



うだつの土曜祭実行委員会/徳島県つるぎ町
●地域振興部門 (p22) うだつの土曜祭



久留米・ラーメンルネッサンス委員会/福岡県久留米市 ●地域振興部門 (p27)

ラーメンフェスタ in 久留米



酒田市国際交流サロン企画・運営委員会／山形県酒田市 ●国際化部門 (p30) 基句パレードに参加するメンバー



アイアンマンジャパン地元実行委員会

三野町国際交流協会／香川県三野町 ●国際化部門 (p36) ちびっこサマーイングリッシュキャンプ



ふくいユネスコ協会／福井市 ●国際化部門 (p32)
ユネスコまつりの英国ステーションで

ワーキングホリデー



岩倉市国際交流協会／愛知県岩倉市 ●国際化部門 (p34)



伝統産業「こいのぼり」作りを体験



留学先の市長表敬訪問で町長のメッセージと「藻塩」を手渡す

静岡県浜松市 ●国際化部門 (p33)



外国の不就学の子供のためのカナリーニョ教室



ネット参加者受け付け風景（兵庫県・香寺町立香呂南小学校）



大阪府池田市 ●情報化部門（p39）
ANSINメールのテスト画面



テレビ会議の準備をする子どもたち（京都府・舞鶴市立朝来小学校）

はりまスマートスクールプロジェクト／兵庫県姫路市 ●情報化部門（p40）

福島県小高町
●情報化部門

(p37)

おだかe-まち
タクシー



おだかe-まち
タクシー
「ほっとステーション」



宇治大好きネット／京都府宇治市 ●情報化部門（p38）
eタウンうじ書き込み実習体験



石垣島関係制作委員会／沖縄県石垣市 ●情報化部門（p41）
石垣島関係HP画面

久留米・ラーメンルネッサンス委員会

ラーメンフエスタで

“活気あふれる街”を再現



委員長

● 本村康人

平成十年三月、久留米の基幹産業であるゴム製品製造会社が経営破綻。久留米の宝物を探して磨き上げることで、街をなんとか元気にしようとする有志が立ち上がった。同十一年

一月、地元の“食文化”であるところ、ラーメンに着目し、久留米がとんこつラーメンの発祥の地であるところを全国に発信し、元気な街にしていくことを目的に「久留米・ラーメンルネッサンス委員会」を発足させた。

全国に先駆けてラーメン題材のイベントを開催

同十一年十一月、ラーメンを題材にしたイベントとしては全国に先駆けての開催となった「ラーメンフェスタin久留米」は、二日間で延べ十四万人の出入を記録。当日は地元から七店、全国から三店が出店。各店

とも早朝から長蛇の列ができ、すべて昼すぎには完売した。
以後、毎年十一月に開催しているフェスタには毎回十万人規模の来場者を集め、第六回目を迎えた昨年は、国内最大規模の文化の祭典「国民文化祭」のイベントとして開催した。



会場内の様子

北海道から沖縄までの招待十四店と地元七店の計二十一のラーメン店が出店し、会場には二日間で十五万人の来場者を集め、約三万食のラーメンを提供した。
この年、福岡県



老若男女が久留米のラーメンに酔いしれた

内で開催された百十五の文化事業の中で最も来場者を集めたイベントとして、関係各位からの注目を浴びた。

小学生から大学生までが学習・論文のテーマに

フェスタを継続するうちに、総合学習の課題にラーメンを題材にして取り組むたいとの声が市内小学校の児童から上がってきた。各児童が自ら店にアポイントを取り、食材の調達先、調理方法を取材し、めんあげ体験を行うなど、“食文化”ラーメンが市民に対し、郷土愛という形で波及効果を及ぼしたのである。その後も中高生が自由研究のテーマに取り上げたり、大学生が卒業論文のテーマにしたりと、毎年全国各地の大学生が事務局まで視察に訪れている。
また、委員会発足と併行して「久留米ラーメン探偵団」を同十一年六

月に結成。ラーメン好きな一般市民を公募して、それぞれが店を食べ歩き、その結果をまとめたラーメンマップを作成した。その後は、ラーメン店主の指導の下でラーメンの手作り体験をしたり、市内各ラーメン店の味・店舗作り、接客態度などの総合的な観点から調査し、その結果を各店へ情報提供してサービスの向上を図る活動や、身障者の施設の人をラーメン店に招待するなどの活動を行っている。

過去六回のラーメンフエスタを開催して、多くの市民ボランティアの力添えと関係各機関の支援により、全国に認知してもらえようというイベントに成長させていた。このイベントを通じて、久留米市が全国に誇れるような街に成長・発展し続けるよう、今後ともがんばっていきたいと思う。また、これを年に二日間だけのお祭りとしてではなく、一年中全国から多くの来訪者があるような、「毎日がラーメンフエスタ状態の活気あふれる街」になるよう、新たな取り組みを検討していく予定である。

久留米がよい香りを発するように。

アイアンマンジャパン地元実行委員会

日本で唯一の国際大会
誘致による「感動の島」

アイアンマンジャパン大会事務局

北川 数幸

五島振興の起爆剤に
トライアスロン

わが町、五島市は日本の最西端に位置する長崎県五島列島の人口五万人弱の小さな市である。平成十六年八月に一市五町が合併したばかりで、新たな地域づくりに市民全員が頑張っているところである。こうした中、アイアンマンジャパン地元実行委員会が総務大臣表彰の受賞を受け、地域を挙げて喜んでいる。

一九九七年のびわ湖大会以来、日本では「アイアンマン」大会はおこなわれていなかったが、下五島の一市五町と約八十の民間団体が地元実行委員会を組織し、五島振興の起爆剤として誘致、二〇〇一年から自然豊かな五島福江島を舞台に開催された。今回、二〇〇五年に第五回記念大会を迎えることになり、「GO

（五年）GO（五回）GOTO」を合言葉に機運を盛り上げ、大会が開催される五月に向けた準備を始めている。

「アイアンマンの島」
が定着へ

アイアンマンジャパンは日本で唯一の国際大会で、制限時間十五時間内にスイム三・八キロ、バイク（自転車）百八十・二キロ、ラン四十二・二キロの三種目を一人の競技者が連続しておこなう過酷な競技。選手約一千人、選手同伴者や大会スタッフ約二千人の合計約三千人が来島する。

その中には世界二十数各国から約百人の外国人が含まれ、国内外に五島をアピールすることができ「アイアンマンの島」として定着しつつある。毎年十月には世界大会が

ハワイで開催されるが、地元の人からトライアスロンジャパンのTシャツを着ていたのには驚き、五島から来たということでも温かく歓迎していた。

大会を運営するには約三千五百人のスタッフが必要だ。地元小中学校生をはじめ市民のみなさんが朝六時から夜の十一時まで、競技補助員、通訳、マッサージ、受け付け、パーティー接客など、さまざまな業務をボランティアスタッフとして支えてくれる。また、

競技日は島内全域で約九時間の交通規制が行われるが、市民に全面的な協力をい



バイクスタートする選手と沿道のスタッフ、応援者



選手にドリンクを手渡す高校生ボランティア

ただいている。時々おしかりの言葉もあるが、改善しながら、よりよい大会を目指し活動している。このように全島民が一つになって大会を運営している。

小さな島が一体となった
「入づくり」

そもそもこの大会を誘致する時、この島を担う子供たちに「夢と希望」を。この島を自慢で語るために。国際大会をこんな小さな島でも一体となればできるんだ」を理念に掲げ、継承してゆくことで「ひとつく」を行ってきた。

まだまだ鎖国的な風潮が残るこの島に、多くの人たちが来てくれることでたくさんの出会い、触れ合いを持つことができ、スポーツを通じ感動することが人として成長すると感じている。子供たちがこの島を愛し、いつまでも誇りに思ってくれる、また常に人生のアスリートであることを切に願う。

五月二十二日、世界で一番熱くなる島「五島」に遊びに来ませんか。一緒に素晴らしい感動を味わいましょう。

宮崎県西米良村

「カリコボーズの休暇村・米良の庄」づくり



村長

● 黒木定藏

私たちの住む「米良の庄」は、九州中央山地のご真ん中に位置し、重畳たる山々に囲まれ、村土の約九六%が山林で占められている。平家、南朝方、菊池一族など、落人たちの隠遁の地であり、名を隠し身を潜めるには適地であった。このような環境の下、当然のこととして過疎化、高齢化は他に先んじて進み、昭和二十年に六千八百十二人の村の人口が、平成十年には千六百人にまで激減した。

基本コンセプトは「生涯現役元氣村」

近年、経済の低迷が続く中、村の将来に向けた展望に危機感が高まり、新たな視点から長期総合計画の見直しを行い、「カリコボーズの休暇村・米良の庄」づくりに取り組むことにした。基本コンセプトを菊地

氏の薫陶「生涯現役元氣村」と定め、村内に八つの庄を設定し、それぞれの庄にその地の特性と目的を持たせ、拠点づくりの核と位置付けた。その基本は、村の活性化はおのの地域の活力にあり、その構成員である各村民に起因するとし、村民一人一人が誇りと生きがいを持って住み続けたい、と思う庄(里)づくりを目指すことにした。

まず、最初に取り組んだのが「健康づくりの庄」の建設であった。幸い極めて上質の湯にも恵まれた。この施設の運営システム、社員教育などに独自性と専門性を高めるために、プロの指導を仰いだ。

地産地消による最高のもてなしを

その一つを紹介すると、料理へのこだわりである。器も特注で焼き、

地採りオンリーの食材を使用し、郷土料理を中心に県下でトップの料理人の指導の下、新たな西米良独自の季節性あふれる献立作りに努めた。海から遠隔のこの地で、刺身やステーキを所望される客はいないと思われるため、地産地消の最高の料理でもてなすことが私たちの使命であり、また求められるサービスであるとの認識に立ち、以後、全ての交流事業でこの考え方を踏襲することとした。

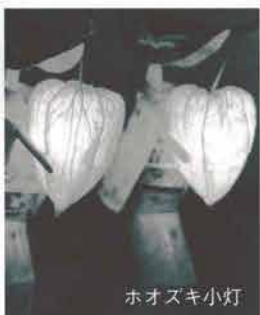
「観光とは国(地域)の光を見ることだ」と言われるが、最近

「観光とは人の輝きを心に感じることだ」と聞いている。今まで、名所・旧跡の無かった地域が観光で生きることとは困難とされてきた。しかし人が、財であり

「源」であれば、いずこの地でも旅人の心を満たし、交流による活力の導入が可能となる。まさに私たちの村がそうであり、皆無の状態からの出発だった。



カリコボーズの魚釣り大会



ホオズキ小灯

都市生活者のワーキングホリデーの場には、景勝地や有名神社仏閣を必ずしも必要としない。必要なのは、交流を求める互いの心と自らの生き方に誇りと楽しみを持っている人たちである。安・近・短の余暇利用の受け皿として、また都市生活者の多様なニーズに応える地域づくりを目指す。

現在、「ホオズキ小灯」「ホオズキツリー」「ホオズキ七夕」など、さらに本物・山採れ「カリコボーズの山菜祭」、村民総参加の村づくりの一例である

「朝風呂会・夕風呂会」、豊かな川の恵み(カリコボーズの贈り物)のいを(イヲ)おすそ分け、「春一番カリコボーズの魚釣り大会」や「鮎カップイン西米良」語り部の夕べ「神楽」「ふるさと村民制度」などを展開中である。これからも地域活力の向上を目指し、村民挙げて春秋に富む心を忘れないにチャレンジを続けていこうと思っている。

酒田市国際交流サロン企画・運営委員会

在日外国人の支援を通じた
国際交流の推進

企画運営委員長

川上クリツティカー

酒田市は、山形県の最上川の河口に発達した人口約十万人の港町。庄内米を産する庄内平野、それに広大な庄内砂丘を有し、日本海に浮かぶ飛鳥は秀峰島海山とともに鳥海国定公園を形成するなど、「海あり、山あり、川あり、島あり」の豊かな自然環境に恵まれている。一昨年、市制施行七十周年を迎えたが、古くから北前航路の一大寄港地として栄えた酒田港は、県内唯一の重要港湾であり、五百年の歴史がある。

本市の外国人登録者数は、平成六年三月末に百八十七人だったが、同年十一月末には三百二十五人、本年一月末には十五カ国五百八十二人に増加した。

在住外国人に眼を向け、同じ市民として受け入れ、互いの人権を尊重し、共生していこうとする考え方、そ

して、在住外国人にとって住みやすく活動しやすい生活環境を提供するとともに、市民との多文化交流を通して相互理解を深め、市民の国際化を推進することを目的に、「学習・交流・相談」をテーマに、市は平成十一年一月、国際交流サロンを開設した。

サロンの活動を支える
ボランティア

国際交流サロンの活動は現在、日本語学習支援ボランティア「べにばな会」と国際交流サロン企画・運営委員会の両市民ボランティアにより、支えられている。

べにばな会は、在住外国人が言葉の違いにより日常生活に不自由さ、不便さを感じないで生活できるように、同十三年四月に設立された。現在の会員は四十人で、五カ国三十九



ロシア料理交流会

人の学習者に指導している。教室は月々金曜日の平日毎日、午前、午後、夜間の各二時間開催されており、三十七ある教室の形態は、マンツーマン指導と一部少人数指導である。

会では花見やクリスマスパーティーなど、会員と学習者・家族との交流や、ボランティア養成講座、会員のスキルアップ講座を開催している。市国際交流室は、講座費用の支援、教科書・指導書購入費の支援、会員と新規学習希望者とのマッチングなど、会員が活動しやすいように環境整備の面で支援している。

企画運営委員会は同十三年四月に設立された。在住外国人九人と市民五人で構成し、サロン利用者の声を集約して企画・運営に活かすとともに

に、在住外国人と市民の交流を促進するため、「国際交流サロン祭り」や「外国料理交流会」の開催、「踊りパレード」への参加などを企画・実施している。

地域に届け込む活動と
FMによる市政情報の発信

在住外国人の日常生活の利便性を高めるために、小中学校、防災学習館、ハローワーク、市立図書館、市立病院などの施設巡りを開催している。情報提供として、「医療ガイドブック」「ごみルール」「日本の運転免許をもらうためのガイドブック」「酒田紹介パンフレット」「会話・単語集」を市国際交流室で発刊した際には翻訳に協力するなど、在住外国人支援にも取り組んでいる。

国際交流サロン祭りでは、企画・運営委員会が中心となり、生徒・学生五十八人を含む市民ボランティア二百四十人の実行委員会をまとめ、外国料理屋台、民族衣装の試着、世界の歌・踊り・ゲームの披露などを行い、来場した二千五百人の市民と多文化交流を深めた。

今後は、地元FM放送局と連携し、四月二日から市政情報や外国の文化、行事、料理などの情報を中国語、韓国語、英語、日本語で提供を開始する。

TINの会（つくばインターナショナルネットワーク）

外国人研究者による
国際都市の生活基盤づくり

世話人 ● 大須賀ケネス 開雄

TINの会(Tsukuba International Network)は、一九九八年から活動してきた。発足当時、市内の組織間の交流はなく、外国人の多くは受け入れ機関が面倒を見る構造であったため、まちの国際化は非常に遅れていた。外国人は所属の組織を一步出ると諸問題に直面し、そのしわ寄せは外国人受け入れ担当者になっていた。

せめて外国人向けのガイドブックくらい分担して共通に製作しよう、それ以外の問題も一緒になって解決していこうという声が高まり、各研究機関の外国人受け入れ担当者の集まりとして発足した。つくば市国際交流室の参加を皮切りに、県や法人などの組織、商工会、ボランティア団体なども参入し、いわばつくばの広範な組織間の連携メカニズムがつけられた。そこで話し合われた問題

点や解決策を持ち帰り、所属の組織で対応できる問題は解決し、団体で交渉すべきものの、例えばバス路線番号の表示、入管出張所の設置請願などはみんなで一緒になって動いた。

印鑑登録、運転免許から
病院や警察の対応まで提案

いろいろな情報、例えば外国人登録、印鑑登録、健康保険、バス路線図、公共交通機関の使い方、運転免許や自家用車購入、車庫証明などは、日本人にすら分かりにくいので、これらの案内書を作成してきた。つくば市国際課の重要性も認識され、市ホームページやガイドブックも整備されてきた。外国銀行発行のクレジットカードはほとんどの銀行ATMで使用不可能なことから、銀行への働き掛けを行い、病院や救急隊、警察の外国人対応についてもさまざま

な提案をしてきた。TINのメンバーが外国人医療に関するアドバイサーとしても寄与してきた。

「国際都市つくばの共生教育を考えるワークショップ」では、外国人の子どもの支援にとどまらず、日本の初等教育が国際的にみて十分受け入れられるものになれば、外国人も安心できるし、日本の将来にとって望ましいのではないかと、という観点で二回実施。また中学生以上を対象とした「英語で面白い話を聞く会」をはじめ、NHKの高柳雄一氏、宇宙飛行士の毛利衛氏、ノーベル物理学賞受賞のジェローム・フリードマン氏らの話を聞く講演会などを実施してきた。

市報と生活相談の
六カ国語対応がスタート

市国際課の努力で、つくば市報の生活相談が六カ国語対応で始まった。市のウェブ情報も充実してきた。TINの会での情報交換により各組織での外国人対応は大幅に改善され、外国人研究者、技術者たちがより仕事に打ち込めるようになった。組織外での活動が、組織内部にとつ



て大きな改善をもたらした。まさに最初の狙いが少しずつではあるが実現してきた。

われわれの活動は新聞社、市、県などからも広く支援されてきた。これは、既存の枠を取り外した連絡機構を作り上げたことが大きかったと思う。縦割りの枠がないことは、実際の成果につながった。市へのいろいろな要望を、つくば市も実現させてくれた。こうした組織構造を持つわれわれの活動は、ユニークさを持っているものと思う。

ふくいユネスコ協会

国際理解の理念を地域の
民間活動で実践

副会長

● 小竹三恵子

ふくいユネスコ協会を設立したのは、インターナショナル・バリアフリー・ボランティアなどの外来語が波及しつつあった五年前だった。ユネスコ協会とは、国連のユネスコの理念にのっとり、世界遺産保護、寺子屋運動などを通して、世界平和を推進する全国に三百余ある民間ボランティア団体である。

さて、この国際的理念をいかに地域の人たちに伝え、それが生涯教育・活性化にもつながり、また団体としての知名度を上げるかが課題だった。そして、民族多様性が比較的乏しい日本には、子ども



ユネスコ祭り

のころからイベント性のある事業の中で、異文化の知識を深め、外国人との交流もできる仕組みのある事業が必要との結論に至った。

異文化理解のチャリテイウォークを開催

毎年秋の「ユネスコ祭り・チャリテイウォーク」と称する、当協会が独自に実施している事業を開催したのは、設立間もないころだった。“difference is beautiful”「異なっていることは美しい」と言う国際交流に必須の文言は、肌・言葉・文化が異なる人々を認めながら、共存していくことが本来、人間として生

まれてきた美しさであり、尊厳であるということの意味している。この理念を、全員参加型のこのイベントに導入した。

簡単にその仕組みを紹介する。福井市の「歴史のある道」と呼ばれる市街地周辺に、世界各国に見立てた模擬ステーション（ST）を十カ所設置する。各STには、各国の情報と、それを読めば解答できるクイズが提示され、国別のおやつも準備されている。さらに、ユネスコ運動の寺子屋募金の箱もある。

STのスタッフは、会員、学生、外国人ボランティアと文字通りバリアフリーである。約五百人の小学生の参加者は、こちらが作成したパスポートと入国税に見立てた十円玉



寺子屋運動募金

募金を持ち、市街地の各スポットでクイズを解き、歩いて回る。ゴールではジュニアユネスコ大使の称号も授与される。主催者側も参加者も、心身共に屋外で肩ひじ張らず楽しく学べるようになっていく。

地域遺産保全の活動も展開

見落としがちな自分の生まれた町・国の歴史文化を学ぶことは、国際化途上には必須であり、また地域遺産を見いだしていく仕組みの中にこそ、世界遺産保全の理念もあると考えるからである。福井市の真ん中に位置する柴田勝家公やお市の方が祭られる神社境内にて、高校生から入国印をもらい、クイズを解いたち

びつ子に話し掛けながら、チャイを手渡すサリ姿のインドの留学生、次のSTに先導するおじいちゃん会員、このような限りなく優しいインターナショナルな光景の下、確実に人が市街地に集う。

イベント当日までには、約半年の実行委員会が夜な夜な開催されることも追記しておく。最後になったが、ここに至るまでサポートしてくださった行政諸機関、さまざまなボランティアの方々、そして何よりもふくいユネスコ協会会員と受賞の喜びを分かち合い、さらに今後のビジョンを検討していきたい。

静岡県浜松市

外国人との「地域共生」のまちづくり

ブラジル人が
日本一多く住むまち

浜松市は東京と大阪のほぼ中間に位置し、明石山脈、天竜川、浜名湖などの豊かな自然に恵まれた面積二百五十六平方キロ、人口六十万人を超える中核市である。現在、本市を中心とした十二市町村による合併（二〇〇五年七月）、そして〇七年四月の政令指定都市移行を目指して協議を進めている。

浜松市には、楽器産業や輸送用機器、光技術・電子技術産業などの国際企業群が集積し



外国人集住都市東京会議（2002年）

世界都市化ビジョンを策定

ており、近年、これらの産業に従事する外国人が集住し、特にブラジル人は約一万四千人と全国の都市の中で最も多く居住している。



市長 ● 北脇保之

浜松市では、この状況に対応し、市役所窓口への通訳配置、外国語による各種行政情報の提供や生活相談などの在住外国人施策を積極的に進めている。特に〇一年、国際化指針「浜松市世界都市化ビジョン」を策定し、それまでの在住外国人施策を

一歩進めた「地域共生」の考え方を実践している。

日本人も外国人も同じ浜松市民であるという認識の下に、互いの価値観に対する理解と尊重を深める中で、健全な都市生活に欠かせない権利の尊重と義務の遂行を基本とした真の共生社会の形成を、すべての住民の参加と協働により進めていく、という考え方で

ある。このビジョンは、「共生」「交流・協力」「連携」「発信」を大きな柱とし、世界に向けての浜松の発信と外国人との共生社会づくりを目指している。

南米日系人が多く住む都市に呼び掛け、外国人市民に関する問題解決のために外国人集住都市会議を〇一年に創設。外国人市民との共生社会実現のために同年「浜松宣言および提言」を採択し、関係省庁に制度や法律の見直しのための申し入れを行った。翌〇二年には、「外国人集住都市東京会議」を開催し、



浜松市国際交流センターでの日本語教室

関係省庁と各都市首長が日系南米人の在留環境改善のための意見交換を実施している。

「世界都市・浜松」を目指す

世界経済のグローバル化や少子化などが進み、外国人労働者の受け入れ拡大はその動きが活発になっている。私たちは将来、日本の他の都市

においても外国人市民に関わる問題が顕在化し、多くの都市で地域共生が課題になると認識している。これからの粘り強く地域共生の取り組みを続け、真の意味で世界に開かれた社会を実現していきたい。

また、浜松市は世界の約二万五千の都市が加盟している国際組織「都市・自治体連合（UCLG）」に国内の都市で唯一加盟している。このネットワークを活用しつつ、今後も浜松市の魅力と誇りを市民と共につくり、世界に向けて発信できる「世界都市・浜松」を目指していく。

岩倉市国際交流協会

市民が主体の多文化共生
を目指すまちづくり

理事長 ● 内藤和子

会費で運営する
草の根国際交流

市内に住む外国籍の住民らとの共生を目指す「岩倉市国際交流協会」は一九九二年四月、発足した。当時は全国的に外国人就労者の数が急増し、当市でも日系ブラジル人をはじめ、外国籍の住民が一気に増えた時期である。多くの自治体では行政主導の協会が設立された

が、岩倉市では市民による民間の団体として発足し、会員の会費を中心とした運営が始まった。母体となったのはその前年、市制二十周年を記念して各種記念事業が行われた際、市民が中心となって取り組んだ国際交流事業



「市民ふれ愛まつり」協会のブースで世界の料理を販売

実行委員会である。

外国籍の人たちに岩倉での生活に溶け込んでもらおうと、市内の主要施設を書き込んだ手作りの地図を印刷し、市の行事を英語、ポルトガル語、中国語など多言語で紹介したパンフレットとともに、外国人が住んでいそうなアパートなどに配布した。企業研修生や留学生らを一泊ホ

ームステイで会員宅に招き、地元の伝統産業である「こいのぼりづくり」の体験や、市の行事、体育祭、「市民ふれ愛まつり」、盆踊りに参加してもらった。地元の流れを因った。地元の住民と外国籍の人たちとの相互理解が図

られ、「同じ町に生活しているのだから、一緒に仲良く生活したい」との思いからである。

13回目になる
フリリピンへの訪問派遣

協会発足の前年に起きたフリリピン・ピナトゥボ火山の被災者に、市民まつりの収益金を送ったのをきっかけに、「贈る人、贈られる人」という関係ではなく、「困った時はお互いさま、友達になりたい」と考えた協会の十人が、初めて被災地を訪ねたのは協会が発足した年の秋。このピナトゥボ被災地へのホームステイ交流は、「人に会う旅」と名付けられて、小・中学生からも巻き込んで毎年実施され、十三回目の訪問団を送ろうとしている。参加した子供たちは協会のジュニアスタッフとして、地域の活動に積極的に参加するようになった。十回目の訪問では、現地の小学校の校庭に、被災した校舎を改装した図書館「ともだち」を友情の証しに寄贈した。



「盆おどり大会」地元に住む外国人もそろいの浴衣で参加

日本語教室の開講で
深まる交流

外国籍の人たちの中には、日常生活でのトラブルや日本語で届く市からの書類に戸惑う人たちがいた。市と相談して「こんにちはコーナー」と称する外国人相談窓口を、毎月第一・三日曜日の午後、市役所の市民相談室を借りて開始。日本の生活になじめるように相談の糸口になれたら、との意図であったが、そこから日本語教室が生まれた。隔週水曜の夜、公民館の一室で開かれる「日本語ひろば・岩倉」には、

日系ブラジル人や中国人、英語圏の人たちが子どもを含めて十数人集まり、ほぼ同数の主婦や大学生のボランティアと向き合い、和やかに日本語に親しんでいる。

中・高校生会員を中心としたジュニアスタッフの自主企画事業や、休日の学校を会場にしての連続セミナーの開催など、さまざまな試みが続いている。人口四万八千余の岩倉市では、外国籍の人たちが今や二千数百人を超えている。多文化共生を目指す活動はますます欠かせなくなっている。

広島県蒲刈町 (合併により現 呉市蒲刈町)

小さな島が進めた 教育の場での国際化



蒲刈町総務課
主任主事 梶川あづさ

蒲刈町は、広島県の中郡島嶼地域に属し、安芸郡の東端に当たり、南は安芸灘を遠く経て四国連峰を望める瀬戸内海の島である。面積は、蒲刈町を中心に九つの無人島を加えて十八・九平方キロで、人口二千六百人の小さな島である。その小さな島がなぜ、国際化部門で表彰されたのかと言うよりも、小さな島だから表彰されたのではないだろうか。

スコットランド祭が島の国際化に拍車

当町には滞在型リゾートアイランド基地として「県民の浜」がある。「日本の渚百選、水浴場八十八選」に選ばれ、夏には海水浴客でにぎわう。この県民の浜は県が開催した「89海と島の博覧会」のサブ会場として、スコットランドフェスティバルが開催された。民芸品の展示、現地の紹介を兼ねたスコティッシュボール(ダンス交流会)では、小学生から大人まで毎日練習し、本場から迎えたダンスグループのバグパイプの演奏に合わせて、交流を重ねた。その当時、スコットランド出身の蒲刈町講師を迎えて英語教育に取り組み始めたこともあり、国際化に向けて歩き出した町にとって、博覧会のサブ会場となったことは、大変喜ばしいことだった。期間中は町を挙げてフェスティバルを盛り上げた。

その時参加した児童がその後、英国留学に参加することとなる。フェスティバルは大好

評で、この時期からスコティッシュダンスを指導してくれたグループが、十年間にわたり県民の浜でスコティッシュボールを開催した。十年目には、記念大会として日本全国から、もちろんスコットランドからも関係者を招き、盛大に開催された。

中学一年対象の英国留学研修スタート

その後、この経験を生かさないものかと積極的に英国からのホームステイの受け入れや、職員の英国への研修派遣を実施する中、原点である「国際化」と「英語教育の充実」に立ち返り、中学一年生の英国留学研修を実施することとなった。もちろん留学に参加する約三カ月前よりオリエンテーションを行い、海外旅行のノウハウや日常生活、ホームステイ先でのマナーなどの説明を受け、それと同時に、簡単な英会話を習う。保育所、小学校から英会話に親しんでいる生徒はゲーム感覚で英会話をマスターし、留学へと出発する。

留学先では、着いてすぐホストファミリーに会い、習いたての英語であいさつや自己紹介を自分から進んで一生懸命行う。一カ月の英語での生活は、苦労することもあるが、辞書を引きたり、手振り身振りで説明したり、絵を書いたり、工夫しながの生活。学校に行けば、友達と日本語で話をするが、中には

中国やスペインなどの友達もいて、いろいろな言葉で交流をする。英語が共通語となり、教えたり、教えられたりといふ刺激になった。

現在、留学の前の語学力向上のために始めた英語教育は、語学指導を行う外国青年(JET)を招致して小、中学校での学習、保育所と成人の教室での会話中心の学習を行うなど、生の英語に接する機会を中心に行っている。この取り組みも教室の中だけではなく、留学生はもちろん全児童生徒で行うスピーチコンテストでは、小学三年から中学三年、高校分校の生徒までも参加して、英語を楽しく身近に感じるよう、中学生以上は暗唱を中心に発表し、小学生は歌や紙芝居、最近では英語劇まで行っている。中学生は町や県の暗唱大会に参加し、好成績を残している。

普段の生活にも変化は見られる。JETの青年が在住していることで外国に対する住民の考え方も大きく変化してきた。子どもや孫が先生に教えてもらっている。町内の行事があれば積極的に彼らは参加するので、町民も声を掛けやすく、友達になって一緒にスポーツをしたり、時には帰国した青年が懐かしう蒲刈を訪ねて来て、住民の家に招き入れられるなど、身近なことから国際的な町となっていた。

これらはのことは、すべて平成四年に始まった英国留学語学研修の成果と言っているのではないだろうか。しかし、事業に対しての理解はあったが、経費の問題や初めての取り組みに町全体が戸惑いを見せたことは否定できない。そんな中、最初に参加した四人の生徒は不安の中、一カ月の留学に参加、見事親善大使としての役割を果たして帰国した。

英語を習い始めて約四カ月の挑戦は、予想以上に大変だったが、生徒たちは留学生生活を自分なりに楽しみ、異文化への関心も帰国してから日に日に高まった。その後、全額町費負担となり、年々参加希望者が増えた。今回も十三回目の留学研修となったが、どの年も本人の健康状態や家庭の事情などがあり、一〇〇%の参加とはならなかった。

現地フェスティバルで親善大使の役割

最近の留学では、新しい試みを英国と蒲刈の両方で始めている。約一カ月も家族の元を離れて生活することは、不安な時もある。しかし、そんな中で親善大使としての役割を發揮することで、不安から自信へとつながるよう、生徒たちが企画から準備、運営から出演までのホスト役を務めた。習いたての英語を使って、一生懸命チラシ配りやホストファミリーへの招待状作り、出し物の練習とみんなの気持ちはまとまっていた。

蒲刈町をPRする「かまがりフェスティバル」で特産品「海人の藻塩」の紹介や、ホストファミリーや地元の人、お世話になった先生にお礼を込めてのさよならパーティーを開催した。終了後は、ホストファミリーから「良かったよ」「楽しかったよ」と声を掛けられたことが、留学に参加した実感を肌で感じる最高の瞬間となった。それから、インターネットを使って日本の学校や家庭との通信も行い、日本語で連絡する様子は、とてもうれしそうであり、次の日からの英国での生活の励みとなった。

帰国後は、留学がきっかけとなり、英語に興味を持つ生徒、英語教師や留学を目指す人など、英語だけでなく、その他の外国語、それに外国に対する考え方が大きく変化し、その後の進路にも広がりを見せている。今でも、ホームステイ先のホストファミリーと連絡を取り合っている生徒、家族もおり、生徒のこれからの人生の大きな糧となっている。

合併により蒲刈町単独の留学事業は廃止されるが、呉市においても留学事業は行われる。これまで培ってきた町の英語教育は、合併によりますます広がりを見せていくだろう。目指すは、教育の場から国際化を推進していくことである。十三年前とは社会状況が大きく変化した。国際化社会の今、小さな島が表彰されたことは大きな自信と誇りになった。スタートは県民の浜からだったが、英国留学は町の財産として、今後も守り続けていくことが私たちの重要な役割と感じている。

三野町国際交流協会

青少年の育成を目指した
夢とロマンの国際交流

数多くの国際化事業を展開

国際交流をもっと身近なものにしようとして平成四年六月、(財)三野町国際交流協会を設立し、「三野町まるごと国際人」の合言葉の下、中国陝西省三原県や米国ニューヨーク州ユナイテッド州との友好都市交流をはじめとする、数多くの国際化事業を展開している。

中学生の代表がホームステイ体験する青少年海外派遣研修、毎月、在住外国人などを招いての国際理解講座、外国語指導助手(ALT)のやさしい英会話教室、米国教育視察団のホームステイの受け入れ事業、小学生親子を対象としたグローバルセミナー、町内在住の外国



中学生米国派遣。N.Y.総領事館安藤大使を表敬



事務理事 ● 綾 章臣

研修員との交流会、在住中国人の中国語講座、外国文化紹介事業による音楽や文化公演、ベルギーふれあいコンサート、薬草を活かしたまちづくりをテーマとした中国陝西省やベルギーフロランヴィルとの交流事業、友好都市(米国ニューヨーク州、

中国陝西省、ベルギーフロランヴィル)などの代表を招いた国際交流の集い、世界の料理を体験する外国食文化紹介事業、ホームステイ、ホームピジット、通訳ボランティア登録制度の実施など、枚挙にいとまがない。特に同六年にオ

ープンした三野町生涯学習研修施設「天然温泉ふれあいパーク」においては、協会単独の国際交流員を配置し、入浴とセットにした英会話などの外国語教室には、町内外から約三百五十人を超える受講者が集まり、好評を得ている。また、国際交流員の故郷を訪ねるスタディーツアー(年三〜四回)や外国語学習発表会を兼ねた「クリスマス in みの」、英語だけで一日を過ごすイングリッシュワークショッブなどに県外からの参加も多い。町の領域にとらわれず、周辺地域を巻き込んで国際交流の土壌づくりに努めている。

こうした各種の国際化事業は、受益者負担を伴っている。これは参加してもらう側に、その価値や意義を認識してもらいながら意識の高揚を図ることはもちろん、地方財政が厳しい状況の中で、補助金に頼らず自主的な財源で独自の運営を図っていくためである。

町民の一割が
海外スタディーツアーに参加

これまで行ってきた海外スタディーツアーは、参加者が既に九百人を超えた。これは町民の約一割が海外

に渡った計算になる。また、今年で十三回目を迎える町内の中学二年生を対象とした海外派遣研修は、延べ人数で二百人を超えており、現在では学年の三人に一人が友好都市での学校訪問やホームステイなどを体験している。

中国と米国の二コースで派遣事業を実施しているのも県内では本町だけであり、保護者や学校関係者からも強い支持を得ている。さらに中国の雑技公演やベルギーコンサートなど、地方では体験できない外国文化紹介事業などと併わせ、地域の国際交流活動から異文



外国語学習発表会「クリスマス in みの」

化に触れることで子供たちに夢を与え続けている。

ふるさと創生一億円事業がきっかけとなって設立された本町の国際交流協会。わずか人口一万人弱の小さな町からの世界の架け橋として、次代を担う青少年の夢とロマンの育成を目的にした国際交流を、今後も続けていきたい。

福島県小高町

地域の暮らしを守る ―IT活用 of タクシー制度



町長 ● 江井 績

小高町は、福島県の太平洋海岸線の中ほどに位置し、奥州相馬氏の城下町として栄えた人口約一万三千人、面積九十一平方キロの美しい田園地帯が広がる町である。

既存の乗合タクシーを活用したドア・ツー・ドア方式

当町では従来、いくつかの路線バスが運行されてきたが、乗客数が少ないために廃止もしくは運行本数を減らされてきた経緯があった。そのため、住民から交通手段の確保を目的とした住民バス導入の要望が出されていた。住民バスの導入に当たっては、運営管理に高額な経費が予測され、また既に住民バスを導入している他の自治体を研修しても、当初予定していたより実際は利用者が少なく、さらに、雨や雪の日でもバス停まで移動しなければならないこと

が、高齢者向け交通手段として適さないのではないかと判断した。

このような時期に、既存のタクシーを乗合方式で活用し、利用者を自宅の玄関から目的地の入り口まで、ドア・ツー・ドアで送ることができ、かつ利用料金も低く抑えられる交通システム



おだかe-まちタクシー

案を受け、高齢化率の高い当町に最も適した交通手段と判断、現在の「おだかeまちタクシー」が誕生した。

電話予約による効率的な走行・低料金を実現

おだかeまちタクシーは、GIS

(地理情報)、GPS (位置確認)、CTI (コンピュータと電話の統合) のITシステムを活用することで、電話予約に応じた利用者間を結び効率的なルートが選択され、走行する



おだかe-まちタクシーを利用する住民

ことができる全国初のシステムを構築した。また、中心市街地コースを百円、その他を三百円の定額にして、利用しやすい料金設定としているのが特徴である。

さらに、事業主体である商工会のみならず、タクシー会社、地域住民代表や外部有識者(大学教授など)からなる運行委員会が設置され、利用者の視点に立った運行改善を協議するなど、地域との協働・連携による運営が行われている。

商店街活性化にも貢献

おだかeまちタクシーは、高齢者など交通弱者の足確保の目的とともに、空洞化の進む商店街の活性化にも寄与できるのではないかと、

導入した事業である。平成十六年十一月の乗降場所別利用状況によると、郊外からの利用便は医療機関での降車が七割を占め、商店は一割にとどまる。これに対し、帰りの便は逆に商店からの乗車が四割に増えて商店街の買い物客が増加、当初予想通りの成果が得られていると分析している。

また、おだかeまちタ

クシーの運営経費に対する同十五年度の補助金は九百六十六千円であり、町直営住民バス導入の試算と比較しても四〇%の負担にとどまり、経費も削減できている。

少子高齢社会の多様なサービスを展開へ

少子高齢社会を迎えた今日、おだかeまちタクシーは地域の暮らしを支える質の高い事業である。今後は送迎サービスに加え、デマンド予約を組み込んだサービスルートをパソコン画面上に映し出すことができるシステムを活用し、買い物支援、行政情報などの連絡、児童生徒の通園通学送迎など、さまざまなサービスへの展開を検討していきたいと考えている。

宇治大好きネット

IT技術を利用して
地域の団体活動を支援eまちづくり認定を機に
ポータルサイトを開発

宇治大好きネットの設立は、宇治市が総務省の平成十四年度地域情報化モデル事業（eまちづくり）の認定を受けたことを出発点としている。事業は、情報通信化機構（NICT）のGIS（地理情報システム）研究開発支援センターの研究に、地元企業が参画して開発した「Web上で誰でも使えるGIS」を「eまちづくり」の中核として利用し、市民がつかえる地域ポータルサイトの実現を目指して、開発に着手した。

事業は、当初より市民参画型のシステムづくりを目標に、事業の主体である宇治市、システム担当の地元企業および市民団体が参加し、システムづくりのため委員会（eまち構築委員会）を同十五年八月発足させた。委員会では、当初宇治市が構想していたGISに特化したシステム



代表 ● 安江 徹

を広げ、市民により多くの情報提供ができるとともに、ワープロ、電子メール程度の知識で情報入力可能なシステムの構築を目指すこととした。併せて運営組織の検討や会員の募集活動を実施し、翌十六年五月、四十二団体の会員で設立総会を開催、スタートを切った。

会員は営利、宗教および政治活動を目的としない市内で活動する団体を対象に、入会金およびHP「eタウン・うじ」の利用は無料で加入・参加することができる。現在、市民団体、市および地元企業などから選出された十二人で役員会を構成し、運営に当たっている。

地域の団体の活動状況
などを分かりやすく表示

「eタウンうじ」は、GIS技術を活用し、デジタル化された地図上に各団体の取り組み状況や案内・募集、地域の歴史に関するデータや公

共施設案内に関する情報を自由に書き込み、インターネットを通じて幅広く情報を告知し、同時にその場所も地図で分かりやすく表示できるポータルサイトである。

会は設立後、多くの変化に富んだ有益な情報の提供を図るため、市内九カ所の公民館、コミュニティセンターで活動する四百を超えるサークルに対し、会員の加入促進に向けダイレクトメール、電話およびデモなどによる勧誘を実施。これらの新規加入会員に対し、パソコン（PC）入力講習会の実施などサポート体制を整えた。

また、会員の加入促進活動の中で、シニア世代のIT（情報技術）の普及が重要であると考え、試行的にシニア向けのPC講習会を開催したところ、受講者から好評だけでなく、講習の方法によつては確実に成果が上がる



eタウン・うじ入力講習会

ことが確認できた。今後、事業として進めるべき体制を準備中である。

さらに、会を広く市民へ周知を図るため、公民館や市主催のイベントを通してPRを繰り返してきた。

宇治大好きネットの設立総会、今回の地域づくり総務大臣表彰は地元

新聞に大きく取り上げられ、市内および周辺住民へのPR効果が大きかった。これまでの活動の結果、四十二団体で発足した会は、現在約三倍の百二十五団体まで増え、さらに増加しつつある。

運営組織の再構築と
個人会員の加入が課題に

地域ポータルサイトを旨として出発し、一年を迎える宇治大好きネットであるが、さらなる飛躍を図るためにはいくつかの課題も生まれている。設立以降、会は市、地元企業と共に市民団体のボランティアで運営を行ってきた。しかし、

今後増える加入会員に対応していくには、運営組織の再構築が必要とされている。コンピュータシステムも規模の拡大とともにハード・ソフト両面のシステム維持管理の負担が大きくなるため、新たな対応が必要となる。

提供する情報も市民団体だけでなく、宇治市などとの連携で行政の持つ情報提供にも取り組んでいく必要があると考えている。さらに最も重要なのは、今後も安定した運営を確立・継続していくには、運営経費の調達が不可欠なことである。将来的に有償会員として商店や個人なども加入できるよう、現在、検討を進めている。

大阪府池田市

「ANSINメール」で子どもたちの安心・安全を



大阪府池田市長公室危機管理課
安全担当主幹 ● 池田 國弘

子どもの安心・安全を目指した「ANSINメール」とは、尾ひれの付かない確実な情報が確認でき、いつでも、どこでも、誰でも情報が共有できる、配信のみの一方通行の電子メールシステムである。このANSINメールは、「子どもたちの安全に関する情報を希望者の携帯電話などにメールで提供し、子どもたちの安全監視と見守り体制の強化を図る」ことを目的に、池田市が昨年六月八日に運用を開始した。

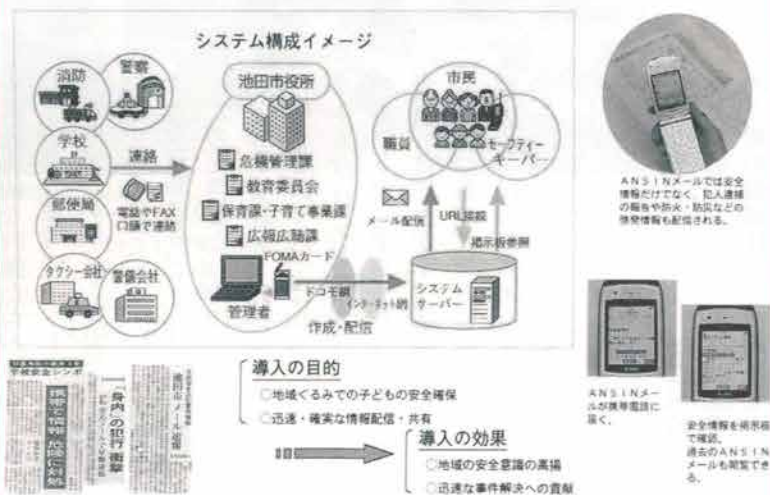
痛ましい児童殺傷事件が教訓に

ANSINメール構築の背景は、安全で住みよい地域社会を実現するため、二度とあってはならない大阪教育大学附属池田小学校における児童殺傷事件（平成十三年六月八日）である。この痛ましい教訓を踏まえ、

犯罪防止への取り組みをより一層充実させるべく、十万市民すべてが安全の守り人であるというセーフティー・キーパー構想の拡大を図るため、必要な情報は共有するコンセプトの下、事件後丸三年を迎えてANSINメール配信を開始した。

配信情報については、不審者情報や子どもに被害の及ぶ恐れのあるものなど、子どもの安全にかかわる内容であり、入手した情報を事実確認とプライバシー確保作業を行った後に、希望者が事前に登録したメールアドレスあてに配信する。対象者は、市内の小中学校、幼稚園・保育所などに通う生徒や児童の保護者などで、メール配信を希望する人。

大阪府池田市 ANSINメール



ANSINメールシステム；Active News From Safety Information Net

四千件以上のアドレスにメール配信

昨年六月一日に登録受け付けを開始、子どもたちの安全にかかわる情報という単一のコンテンツに絞り込んでいたため、二月二十四日現在四千四百四十六件の登録は、四歳から十四歳の子どもの数が約一万人いるとすれば、妥当な件数と推察する。また、子どものいない人も登録でき、一斉配信により確実な情報を十万市民が共有することにより、犯罪の抑止力にもなる。

ANSINメールを開始して一カ

災害発生時の警報・避難利用にも

このANSINメールシステムは、広域で運用すればさらに大きな効果が生み出される。昨年、不幸にも兵庫県、福井県、新潟県において大規模な災害が起きている。各種災害発生時には広報車での巡回やホームページ、ケーブルテレビでの注意喚起を行うことになるが、池田市ではこのANSINメールでも周知させる方針である。安全にかかわる啓発・防犯は当然として、災害における警報・避難勧告も視野に入れての情報配信を予定している。

月後の七月六日午後、ANSINメール配信情報に含まれていた車のナンバーが決め手となって、ある誘かい未遂事件の容疑者が逮捕された。

これまで池田警察署との合同模擬訓練を含むメール合計は二十二件であり、うち本番メールは十九件配信している。情報提供は池田市教育委員会・池田警察署であり、不審者逮捕報告配信二件、防犯情報配信四件である。緊急の場合、迅速で確実な情報配信が可能であり、消防本部、郵便局、市内のタクシー会社、警備会社との連携により、地域ぐるみで子どもたちの安全確保が図れ、その効果が期待されている。

はりますスマートスクールプロジェクト

日本型ネットデイによる
参画と協働の地域づくり

理事長 ● 和崎 宏

災害に強いコミュニティ
づくりから生まれる

「ネットデイ」は、学校の校内LAN整備を、地域一体となったお祭りのようにして行うイベントである。その発想は、一九九五年一月の阪神・淡路大震災でのボランティア活動を契機とした「災害に強いコミュニティづくり」の模索の中から生まれた。避難所となった学校では、被災後しばらくの間、満足に供給されない食べ物や分け合い、誰もが弱者に手を差し伸べて、住民同士が生きたるために助け合い、支え合う姿が見られた。「震災ユートピア」と呼ばれる現象である。この姿を、災害時ではなく平常時に持続・継続的に再現することで、真に災害に強いコミュニティを創造できないものかという思いが、学校を舞台としたネットデイというプログラムの構築へと

米国生まれネットデイを
地域づくりのプログラムに

つながった。

九六年三月、折しも米国シリコンバレーでネットデイが始まった。地域活性化と教育関係の二つのNPOが連携して、ハイテク企業を中心とした地域経済を巻き込み、「すべての学校の全部の教室を高速ネットワークに接続する」ことを目標とするボランティア活動を立ち上げた。その後は、クリントン政権がナショナル・ネットデイとして

運動の旗を振り、三年間で全米の学校のインターネット接続率を一二%から八九%に向上させることに貢献した。

日本でも米国の実施例に倣い、九六年



中古パソコン再生作業（兵庫・姫路市立別所小学校）

から先進的な教師たちが中心となつて、複数の地域でネットデイが実施された。しかし、その活動は、自己完結的で散発的な配線工事に終わり、大きな運動に育つことはなかった。

この転機となったのが、震災ボランティアを経験した住民たちが活動の中心を担った「はりますスマートスクールのプロジェクト」（HSSP）のネットデイであった。配線工事を直接の目的とせず、情報拠点としての機能や地域の核としての学校を支援する住民の仕組みを、ネットデイをきっかけとして構築することを目指した。

HSSPは、教育関係者だけでなく、自治会や婦人会、PTAなど地域の既存組織を活用して、より多くの立場の地域住民を参画させた。また、ホームページやメーリングリストという、本来バーチャルでグローバルな情報通信技術を、地域社会の中に効果的に組み込むことに成功した。HSSPのネットデイは、その

後、沖縄、千葉、長野、和歌山、鳥取、神奈川など、日本各地で実施される活動のモデルとなり、「日本型ネットデイ」と呼ばれ、兵庫県と同様の効果を他の地域に与えている。

学校を核とした
「コラボレーション型社会」

日本型ネットデイには、従来の学校における活動とはまったく異なる特徴がみられる。それは、①できるだけ組織的な動員をせず、参加者の自発を促す努力をする②参加者に多様な活躍の場をつくり、役割分担を行わずに個人が自主的に仕事を担う③誰もが積極的に役割を担い連携する作業を企画する④教師が生徒を指導するのではなく、大人と子どもが共に学び合える場をつくる——などである。

効率や能率を追い求めてきたこれまでの仕組みと違い、プロセスの大切さを重視した試みは、従来の学校と地域の関係とは異なる感覚を、参加する人々にもたらした。この仕組みが旧来、地域住民が互いに協力し、支え合って成立させていた「縁日」のにぎわいをほうふつとさせる「場」を学校に再現し、地域全体で盛り上がる原動力となった。

こうしてネットデイは、参加者が互いに相手を理解して、不足する部分を積極的に補い合い、共に協力して地域に貢献しようという意識を自覚させた。相互に支え合う喜びを体感させることにより、震災ユートピアを再現することに成功し、地域を再ネットワーク化するきっかけとなっている。

(<http://www.ssj.gr.jp/hssp/>)

石垣島閑話制作委員会

地域紹介の情報発信活動
が地域づくりに拡大

代表 ● 柳瀬 力

石垣島と八重山諸島の
自然・文化を発信

インターネットやコンピュータに携わる会社が競って一九九七年、通信環境や表示環境、開発環境、財政面の大幅な改善を行ったことから、インターネット環境は大幅に進化・改善し、個人であっても使いこなすことができるまでとなり、インターネットを使った情報発信が、個人レベルで可能になった。これが、「石垣島閑話制作委員会」が発足するきっかけとなった。

これまでの取り組みは、主としてウェブサイトを利用し、石垣島および八重山の島々の情報発信を行ってきた。サイトを構築するに当たり、地元の自然や文化など、地域を題材とした写真、音楽、音声、映像および情報の交換を基本としてきた。

ホームページを通じて発信する情報は、視聴されることが第一の目的であるため、環境によつての制限などがないように心掛けた。これらを踏まえ「日本の南端に位置する」地理的条件を意識しながら、独自の視点でコンテンツの構成を行ってきた。また、全世界からのアクセスが可能である特色を生かし、英語のページも追加してある。

これらの情報発信および情報交換などを七年半にわたって行ってきた結果、開設以来のア



HP講習会風景

クセス数は三百万を超えた。また、各種メディアから注目され、全国紙、地元新聞社、ラジオ局、テレビ局、専門誌、海外ラジオ局などからの取材を受けたため、地元情報を必要としない地域住民までがホームページの存在を認知するようになった。

インターネット普及の
推進力に

インターネットが隔々まで復旧するとともに、インターネットおよびコンピュータの使用法、接続方法、サイトの構築方法などの問い合わせが多数寄せられるようになった。これは、インターネットを利用して情報発信を続けてきた当委員会が、地元からインターネットの先駆者として認められた結果ではないかと考える。

以来、教育委員会主催ホームページ作成の講習会への講師派遣、生涯学習フェスティバルのインターネット体験ブース出展、八重山マルチメディアセンターへの講師派遣など、石垣島のインターネット普及を手助けしている。

また、もともとが個人主体のホームページ制作委員会であることから、個別の指導にも柔軟に対応することができ、少人数講習、個別設定、アドバースなどを多数行ってきた。問題点としては、個人主体の委員会であるため事務局などは常設しておらず、問い合わせ、連絡などに滞りが出てしまうことだ。また、依頼などに即応する組織体制が取れていない点も挙げられる。

「地域づくり」への
貢献活動に発展

制作委員会の当初の目的は、「インターネットを使用し地域を紹介する」であり「地域づくり」は主ではなかった。私たちの発信した情報は、メディアなどで取り上げられ、地元へと逆流し、地域住民の目にも触れることとなった。

結果として、地域の要望・相談を聞く機会が多くなり、それに伴い講習会や出展など地域密着型の行事にも数多く参加するようになった。ウェブ情報による外部への情報発信はもとより、地元である地域をしっかりと見つめ、これらの知識を地域のインターネットのさらなる普及へと結び付けるとともに、講習会などを通して地域住民との連携をさらに一層図っていききたい。

「大和ミュージアム」が誕生！

―よみがえる歴史の証人と科学技術の

素晴らしさ



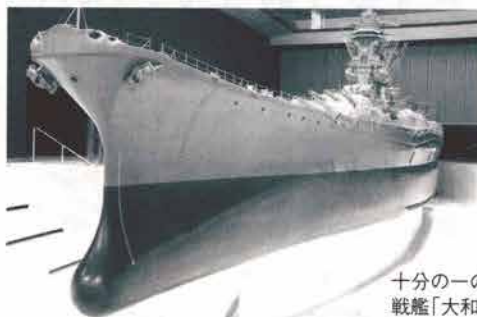
呉市海事歴史科学館

戸高一成

四月二十三日、呉の港に大和ミュージアムがオープンする。

新博物館

は、明治以降の近代化の歴史そのものである呉の歴史と、その近代化の礎となった造船や製鋼をはじめとした



十分の一の戦艦「大和」

各種科学技術を、先人の努力や当時の生活・文化に触れながら紹介し、わが国の歴史と平和の尊さや科学技術の大切さを認識していただこうとするものである。地域内にある既存の資料館など関連施設の核となる施設として、さらには教育・文化、観光などにおいて大きく寄与する施設として、呉ならではのオンリーワンの博物館を目指している。

シンボルは十分の一戦艦「大和」

一階中央の「大和ひろば」では、大和ミュージアムのシンボルである全長二十六・三メートル、実物の十分の一の戦艦「大和」を展示する。戦艦大和は、昭和十六年（一九四一年）十二月、呉海軍工廠（海軍直轄の工場）で、当時の最先端技術の集大成でありながら極秘裏に建造された世界最大の戦艦である。同二十年（一九四五年）四月七日、沖縄特攻作戦に向かう途上、米艦載機の攻撃を受け沈没、乗員三千余人のうち約三千人が大和と運命を共にした。

ゼロ戦、回天などの実物資料も展示

一階「呉の歴史」の展示では、明治二十二年の呉鎮守府開庁から現在に至る呉の歴史を、世界とのかかわりとともに紹介し、現在の平和が多くの人々の労苦の上に成り立っていることを教えている。また「大型資料展示室」では、零式艦上戦闘機（ゼロ戦）や人間魚雷「回天」など、数多くの貴重な実物資料を展示し、戦争の悲惨さ、平和の大切さを訴える。

三階「船をつくる技術」の展示は、



「呉の歴史」展示

船にかかわる技術や原理を、分かりやすく理解できる体験装置のほか、実際に船を走らせて動きを観察する実験水槽などもある。「鉄の船が浮かぶのは、なぜだろう」博物館と言われている。数多くの歴史遺産が残る呉は、まち全体が博物館と言われている。

博物館のまち「呉」の核となる施設に

とか「大和の先端って何で丸くなってるんだらう」など、普段は気が付かない不思議を発見できる。週末にはサイエンスショーや工作教室なども開催するので、ぜひ親子で楽しんでいたきたい。

三階「未来へ」の展示は、海洋開発や宇宙開発など未来を夢見ることができる展示室である。ミニシアターでは未来の火星での生活を紹介する映画や、当館の名誉館長でもあり、漫画「宇宙戦艦ヤマト」の作者松本零士氏の世界など、未知なる宇宙を通じて、未来の科学技術を夢見ることができる。

四階テラスからは戦艦大和を建造したドックや海上自衛隊の基地なども一望でき、多くの旅客船が目の前を行き交う。また、運が良ければ、鉄のクジラとして人気の潜水艦が航行しているのを見ることができ。

地域づくり団体
全国研修交流会

「歴史に遊び、未来を語る」奈良大会

全国各地から地域づくりに携わる三百人以上の人々が集う、第二十二回地域づくり団体全国研修交流会奈良大会が二月十七、十八の両日、奈良県で開催された。大会は地域づくり団体全国協議会、奈良県地域づくり団体協議会などが主催し、地域づくりにかかわる多くの団体が参加した。

今大会のテーマ「歴史に遊び、未来を語る」は、これまでそれぞれの地域で取り組んできた成果を踏まえ、まったりとした（地元の方言で「ゆつたりとした」の意味）時間の流れ、空間の四方への広がりのある奈良の地で、全国各地の参加者と「ゆつくりと、でもしつかり」と、それぞれの地域の未来を語り合う趣旨から設定された。

大会初日は、大淀町の「文化会館あらかしホール」において、全体会が開催された。開会式では、吉野町の金峯山寺の修験者四人がほら貝を鳴らして会場内を回った後、主催者として森巖夫地域づくり団体全国協議会会長から「温故知新と言う言葉があるが、今回のテーマはまさに、奈良なら『ではのもの。今大会であらためて地域の歴史を見直し、地域づくり活動を発展させる一助となれば』とあいさつした。舞台では地元大淀町の小学生による「ちびっこ椀本座」の公演があり、続いて昨年

七月に世界遺産リストに登録された紀伊山地の霊場と参詣道の霊場「吉野・大峯」の紹介ビデオが放映された。その後、次回開催県の沖縄大会準備会によるPRが行われ、「鳩間節」の披露、委員長のあいさつの後にカチヤーシーの踊りで締めくくった。

全体会に引き続き、県内十一市町村（奈良市、大和高田市、橿原市、五条市、御所市、斑鳩町、曾爾村、明日香村、吉野町、黒滝村、川上村）の会場に分散して、分科会が開催された。分科会は、古くからの街並み保存、地域の歴史、観光と交流、世界遺産に関するもの、アートによる地域づくりなど、奈良県各地の特色を生かした多様な内容となった。私に参加した第三分科会は、橿原市の重要伝統的建造物群保存地区である今井町において、町並み保存会や観光案内ボランティアによる町並み見学会が行われた。

今井町は室町時代末期の寺内環濠集落であり、町内には八つの重要文

化財と四つの県指定文化財の建物がある。その他の家も歴史のあるものが多く、改築や新築する際は伝統的な外観に統一しなければならぬ（修景）規制がある中で、現代生活の営みへの工夫が各所に凝

らされていた。夜は、分科会参加者による現地交流会が行われ、そのま

ま夜なべ談義に移り、地域づくりについで熱心な議論が続けられた。

翌日は前日の見学会を踏まえて、県指定文化財である今井まちなみ交流センター華蔵で、奈良女子大学の上野邦一教授をコーディネーターに、重要伝統的建造物群保存地区における保存整備や文化と経済を兼ね備えるまちづくりの事例発表会が行われた。発表の後に質疑応答と意見交換となり、分科会としての取りまとめが行われた。



ちびっこ椀本座

を使った「おかゆさん（茶粥）」を炊いて、県産の食材、食器を用いた奈良県ならではの料理を味わうことができた。また同町は今井宗久ゆかりの地なことから、「お茶と豪商の町」の茶席のために特別に作ったまんじゅうが披露された。こうした努力を払って今井を訪れる人をもてなす地元の心遣いに、地域づくりの精神を教えられたような気がした。こうして二日間の大会プログラムが終了した。

今大会は、奈良県内各地の歴史に基づいた地域づくりの特色を現地で味わう分科会に重点を置いており、各地域の歴史と文化を生かした人々の地域づくりへの熱意と、温かいもてなしの心を感じ取ることができた。参加者同士の交流の中から、それぞれの地域づくり活動の未来に向けたきっかけが生まれたのではないだろうか。幸いにも天候に恵まれ、地域づくりの知恵を生み出すための「まったり」と、そして熱心な議論を交わした「しつかり」の二日間であった。

今回の沖縄大会は、平成十八年二月十日（金）、十一日（土）の両日に開催予定。

（財）地域活性化センター研修交流課

副参事 ● 池田義之

好評！「出前研修会」

地域おこし研修会、別名「出前研修会」。その名の通り地元の要望、開催テーマに応じ講師とカリキュラムを準備、開催経費の一部を地域活性化センターが負担し、研修会を出前する制度である。平成十六年度は要望があった全国六カ所の特産品開発や観光おこしをテーマとした研修会を開催し、好評を得ている。この研修会は地域活性化センターの研修ノウハウを生かし、実務経験豊富な講師の指導による地域の課題に応じた「実践的」な研修内容の特徴としている。

この「出前研修会」を利用した団体の開催担当者、研修会の状況を報告してもらった。

山形県酒田市

新しい土産品開発を どんどん進めていきたい

酒田観光物産協会幸の館支配人

登坂俊二

酒田市は山形県の北西部に位置し、最上川が日本海と出合う古くから開けた港町である。背後には広大な庄内平野が広がり、対馬暖流の影響を受けた温暖湿潤な気候がわが国有数の穀倉地帯を形成している。北西約三十九キロの日本海上には県唯一の離島である飛島があり、秋田県との県境にそびえる鳥海山とともに鳥海国定公園に指定されている。面

積は百七十六平方キロ、人口約十万人の県内第二の都市である。

昨年四月、築百年以上を経た酒田のシンボリック米蔵・現役山居倉庫に、酒田市観光物産館「酒田夢の倶楽部」が誕生した。観光拠点として酒田の歴史と文化（辻村寿三郎の人形併設）を伝えるミュージアム、レストランも併設している。

これまで酒田は、通過型観光地と

いうこともあり、土産品が少なかった。そこで、酒田夢の倶楽部開店を契機に新商品開発を進めるため、研修会などを通じ、地域特産品開発も含めた新しい土産品を生み出していきたいと考えていた。

そのような中、市の

紹介で地域活性化センターの研修会を知り、平成十六年九月十六日に地域活性化センターに委託した「地域おこし研修会（地域産品・観光おこしコース）」を開催、当日は酒田観光物産協会会員らに呼び掛け、二十一人の参加者を得た。

研修会では福岡から地域振興研究所の須川一幸先生にお越しいただき、講演、産品アドバイス会、グループワークを開催、参加者一同、熱心に聴講し活発な意見交換が行われ

た。産品アドバイス会では五品目について相談、グループワークでは「ごといも（飛島のじゃがいも）でおい



グループワーク（酒田市）



発表（酒田市）

開発の考え方・進め方なども指導いただき、大いに参考となった。

今後は、新しい施設の良さを存分に発揮できるよう、新しい地元素材を使った土産品をどんどん開発・販売できる体制を後押ししていきたいと考えている。特産品と大上段に構えてはなかなか進まないで、小さな土産品作りから始め、客の声を聞きながら改良を進め、とにかくどんどん新作ができる風土を育てていき

しいと評判）のネーミング、パッケージ、売り出し方法などの検討、「東京在住の中学生の家族連れを対象とした体験型観光誘致」、「酒田の観光名所、観光資源と土産品、特産品開発」の三つのグループに分かれ、活発な議論を展開した。須川先生からはさらに地域特性を活かした特産品

「研修会」開催状況

開催テーマ	講師
観光おこしと土産品開発	(株)地域振興研究所 須川一幸氏
宝の山と自然・文化をまるごと活用するには	(株)リージョナルプランニング 前田 豪氏
陶街道お宝探し	(株)地域振興研究所 須川一幸氏
特産品開発と観光振興	(株)地域振興研究所 須川一幸氏
特産品開発と観光振興	(株)地域振興研究所 須川一幸氏
地域資源発掘と観光ルートの設定	(株)地域振興研究所 須川一幸氏



講義（磐梯町）

があり、庭園には国の名水百選に選定された水が引かれ、連日多くの人が水を汲みに訪れている。

また、町には「アルツ磐梯リゾート」があり、グリーンシーズンにはゴルフ、ウィンターシーズンにはスキー・スノーボードが楽しめるなど、一年を通して県内外の多くの観光客を楽しませている。

そのような中で今日、過疎化、少子高齢化、景気の低迷などの影響で、町内の元気が衰えてきており、なんとか町を活性化させようと町観光協会を中心として「ないものねだりをやめ、あるもの活かし」運動を展開し、町の資源掘り起こしに努力してきた。

平成十六年十月十五日、町の隠れた資源・魅力を再発見するために地域活性化センターに委託し「地域おこし研修会（地域産品・観光おこしコース）」を開催、町商工会会員・観光協会会員を含めた町内各層の二十人が参加した。

研修会では、地域おこしの第一人者、リージョナルプランニングの前田豪先生を迎え、「宝の山と自然・

たい。また、酒田夢の倶楽の推奨品作りも進める予定であり、必要な研究など今後、状況に応じ継続開催していきたいと考えている。

福島県磐梯町

町の隠れた資源・魅力を再発見へ

地域振興課企画財政グループ商工観光業務主任

渡部 建

磐梯町は、福島県会津盆地の北東部に位置し、その名の通り磐梯山の麓からなだらかに広がる南丘陵にある人口約四千人の町である。

この地は、平安初期に最澄、空海と並び称された学僧徳一により慧日寺が創建され、会津仏教文化発祥の地として千二百年にわたる栄枯盛衰の歴史があり、広大な寺跡は昭和四十五年に国の史跡に指定された。その近くには慧日寺関連文化財の保存、公開、活用を目的としたガイダンス施設として磐梯山慧日寺資料館

「梯子リゾート」があり、グリーンシーズンにはゴルフ、ウィンターシーズンにはスキー・スノーボードが楽しめるなど、一年を通して県内外の多くの観光客を楽しませている。

そのような中で今日、過疎化、少子高齢化、景気の低迷などの影響で、町内の元気が衰えてきており、なんとか町を活性化させようと町観光協会を中心として「ないものねだりをやめ、あるもの活かし」運動を展開し、町の資源掘り起こしに努力してきた。

平成十六年十月十五日、町の隠れた資源・魅力を再発見するために地域活性化センターに委託し「地域おこし研修会（地域産品・観光おこしコース）」を開催、町商工会会員・観光協会会員を含めた町内各層の二十人が参加した。

研修会では、地域おこしの第一人者、リージョナルプランニングの前田豪先生を迎え、「宝の山と自然・

文化をまるごと活用するには」と題した講演をいただき、その後三グループに分かれ「もてなしから見た新魅力づくり」「環境・美化から見た新魅力づくり」「体験プログラムから見た新魅力づくり」をテーマにグループワークを行った。



グループワーク（磐梯町）

グループワークでは参加者一同、白熱した議論を展開し、町の歴史、自然、文化を活かすため、慧日寺の歴史を活かした修験者体験や名水を活かした商品のPR、ただの観光マップではなくもてなしの心を持ったマップづくりなど、多くのアイデアが出された。

★ ★ ★

今後は、この研修会のアイデアを具現化するためのグループなどを組織し、「地域おこしの一番バッター」をまず星に出すよう、現在取り組みを進めているところである。

★ ★ ★

レポートをいただいた両団体をはじめ、各地でさまざまなテーマに基づき研修会を実施している。（別表参照）

グループワークを中心とした研修内容は、参加者自らが地域の課題を自分たちで考え、解決方法を探っていくことを目的としており、実際にこの「地域おこし研修会」を契機として新たな取り組みを行う地域も見受けられる。

今年度はさらに利用しやすい制度に改め、地域からの要望に対し研修会を「出前」する予定であり、開催希望・問い合わせについては業務第一、二課までお寄せいただきたい。

平成16年度「地域おこし研

開催地	実施日時
山形県酒田市	H16.9.16
福島県磐梯町	H16.10.15
愛媛県砥部町	H16.11.20~21
福井県鯖江市	H16.11.24~25
長崎県平戸市	H17.1.29~30
福岡県久留米市	H17.3.16

参加者の中からは、「さまざまな職業の人と討議することで、町文化の再認識ができた」「地域おこしは大掛かりなイベントなどに固執することではなく、身近にあるものを活かすということを勉強でき、大変ためになった」「今回だけではなく、これを契機に継続していきたい」と言った意見が多く、大変有意義な研修会となった。

センター 通信

平成17年度事業計画・ 収支予算案などを承認

(財)地域活性化センターは三月十四日、第七十五回理事会および第五十三回評議員会を全国都市会館で開き、平成十七年度事業計画案と収支予算案などを原案通り承認するとともに、同月三十一日で任期満了となる役員および評議員の選任を行った。十七年度の予算額は、総額十八億二千九百四十九万五千円で、前年度比三億五千七百六十七万七千円増。

新規事業としては、小・中・高生があれが、目標とするスポーツごとの拠点を形成し、地域の再生を推進するスポーツによる地域振興助成事業、全国各地の地域再生の担い手を育成する地域再生実践塾の開催、地域の逸品や特産品をセンターのホームページ上で紹介する特産品倶楽部の開設など。

人事では、村田純一会長が退任し、新会長に名古屋商工会議所会頭で(株)名古屋鉄道会長の箕浦宗吉氏を選任した。このほか、副会長に麻生渡、全国知事会会長(福岡県知事)、理事に澄田信義、島根県知事、同 藤井繁、仙台市長、評議員に加藤義雄、仙台市副市長、同 濱野健、品川区助役、同 高田恒、全国町村議会議長会事務総長、同 長屋互勇、富士通(株)常務を選任した。任期は同十九年三月三十一日まで。

BOOK CD-ROM GUIDE

センター刊行物・CD-ROM紹介コーナー

「地域活性化」に有益な情報を満載、ぜひご活用ください。
お問い合わせ先 ● 総務部総務課 03 (5202) 6132

コミュニティビジネスと コミュニティの再生について

近年、ライフスタイルの変化や地域への帰属意識の希薄化などにより、地縁組織を基礎とした地域コミュニティの機能が低下しています。そこで(財)地域活性化センターは、現在注目を浴びているコミュニティビジネスに着目し、全国のコミュニティビジネス実践団体へのアンケート調査および8つの事例を対象とした現地ヒアリング調査を行い、コミュニティビジネスの実態や地域のコミュニティとの関連性についての報告書を取りまとめました。

● 価格1,000円(送料別)

会場には、もちがせ流しびな作りの体験ができるコーナーが設けられ、毎日先着二十人(費用一人二百円)が参加して、流しびな作りに腕を競った。二十分程度で素朴でかわいい流しびなが作れるとあって、昼休みや仕事帰りの女性たちが多数



「流しびな」作り体験コーナー

参加。館内は「とつとり花回廊」から届いた花々にも囲まれ、終日、和やかな雰囲気包まれた。また、江戸時代から続く豆腐ちくわやおいり(ひなあられ)、佐治和紙など特産品も販売された。

ふるさと情報プラザ
鳥取「もちがせ流しびな」作りの体験コーナー

「平成17年度 地域活性化フォーラム」の開催迫る!

平成17年度地域活性化フォーラムを4月11日(月)、東京・東商ホールで開催します。

今フォーラムでは、「地域再生のすすめ～地域の特性を活かしたまちづくり振興策～」をテーマに、荒俣 宏氏(作家・博物学者)を招いての基調講演、内閣官房地域再生推進室による「地域再生法」の概要説明、政府、学識経験者、団体有識者などによるパネルディスカッションで、「地域再生にどう取り組み、どう達成していくのか」など、その方向性と課題を検証していくことにしています。

また当日は、日本各地で開催されている地域の個性を生かしたユニークなイベントを表彰する「ふるさとイベント大賞表彰式」を併せて開催します。

ぜひ、皆さまのご参加をお待ち申し上げます。

お申込は当センターホームページ「地域づくり百科」からどうぞ。

<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

日 時	平成17年4月11日(月) 午後1時～同4時40分
会 場	東商ホール(東京都千代田区丸の内3-2-2)
主 催	(財)地域活性化センター
参 加 費	無料
内 容	第一部「第9回ふるさとイベント大賞表彰式」 第二部「平成17年度地域活性化フォーラム」 ①基調講演/荒俣 宏氏(作家・博物学者) ②地域再生法概要説明 御園慎一郎氏 (内閣官房 地域再生推進室・構造改革特区推進室 副室長) ③パネルディスカッション コーディネーター 山口義行氏(立教大学 経済学部教授) パネラー 朝廣佳子氏((株)読売ライオン 代表取締役兼編集長) 金丸弘美氏(食環境ジャーナリスト) 津上俊治氏((社)日本旅行業協会 国内旅行振興策提言部会委員) 御園慎一郎氏
問合せ先	(財)地域活性化センター 情報サービス課 〈電話〉03-5202-6135 〈FAX〉03-5202-0755



荒俣 宏氏

手前みそ
ですが…

柴田町

宮城県

76

昭 和四十五年に「伊達騒動」をモチーフにした作家山本周五郎の代表作「樫ノ木は残った」がNHK大河ドラマとして放映され、作品の舞台になった柴田町は全国に有名になりました。

町の観光イベントとしては船岡城址公園で行われる「さくらまつり」と「しばた菊の祭典」が挙げられます。「さくらまつり」は、千本を超すソメイヨシノが咲き誇る船岡城址公園をメイン会場に開催され、中でも三百五メートルのスロープカーを利用した眺望は、県内外からの観光客を魅了します。町の中心を流れる白石川堤の一目千本桜と併せて、平成二年三月に(財)日本さくらの会より「さくら名所一〇〇選」の地に選ばれるなど、東北有数の桜の名所になっ



船岡城址公園山頂からの街の夜景



船岡城址公園山頂に立つ
船岡平和観音

花と歴史の香る町



「しばた菊の祭典」。NHK大河ドラマ「新選組！」をテーマにした菊人形

ています。「しばた菊の祭典」は、秋に開催される県内唯一の菊のお祭りで、NHK大河ドラマのほか、「宮城の風景」をテーマにした菊人形場面、菊のオブジェやガーデニング場面などもあり、会場内は菊の香りに包まれます。

宮城県に來られた際には、ぜひ柴田町にお越しください。

(財)日本さくらの会から「さくら名所100選」に選ばれた船岡城址公園と白石川堤の一目千本桜

船岡城址公園を走るスロープカー



2月
(実施)★日本橋プラザビル
イベントスペース

●2月16日～18日

七尾特産品協会（石川県七尾市）
能登半島 七尾の観光と物産展
(1)

●2月23日～25日

米沢市（山形県）
「上杉の城下町米沢」観光キャン
ペーン (2)

★ふるさと情報プラザ

●2月3日～4日

沖縄県
沖縄 離島泡盛フェア

●2月8日～10日

君津市（千葉県）
おいでよ！ きみつ 観光キャン
ペーン (3)

●2月14日～18日

中国五県物産観光協議会
中国五県観光展 ～風土に生きづく
美酒をどうぞ！～

●2月14日～18日

(財)東京都島しょ振興公社（東京都）
東京の島の特産品展示即売会

●2月28日～3月4日

鳥取県東部市町村文化観光施設振
興研究会
伝統行事「流しびな」と観光物産PR展

4月
(予定)★日本橋プラザビル
イベントスペース

●4月15日

藤岡市（群馬県）

●4月19日～21日

北杜市（山梨県）

★ふるさと情報プラザ

●4月11日～15日

諏訪市（長野県）
富士見～岡谷間・中央本線開業
100周年記念キャンペーン

●4月18日～22日

京都府
端午に京都・丹後路へ



【編集後記】

▼今月号は、恒例の地域づくり総務大臣表彰（平成十六年度）を特集に取り上げた。各都道府県などの推薦の中から三部門計三十二団体の取り組みが高く評価され、表彰された。日ごろの地道な努力と活動が実を結んだと言える。祝意を表したい。

▼今回も昨年同様、歴史や文化、自然など、地域の資源を活かした特色あるまちづくり、環境保護や景観整備による美しいまちづくり、それに地域産品の掘り起こしや新たな観光資源の発掘、商店街活性化などへの取り組みが目立った。また、海外からの労働者急増など国際化の急速な進展に伴い、外国人との共生を目指したまちづくり、小学生や中学生を対象にした国際交流の拡大など、新しい事例も目に付いた。さらに、子どもを狙った凶悪犯罪の増加を受けて、防犯まちづくりに対する真剣な取り組みもあった。各団体とも、大臣からの表彰によって、これまでの努力が報われたものの、誌面には書き尽くせない苦労が多々あったものと思われる。

▼当誌の編集委員として誌面の企画・立案、作成に携わった有泉清貴（山梨県）、木下奈緒美（岐阜県）、田中真一（三重県四日市市）、小林悟（奈良県）、佐藤正明（兵庫県）、堀明子（山口県）、久保田淑子（愛媛県）、山本晋平（高知市）の八氏が、三月末で帰任した。新しい職場での活躍を期待したい。

(沢)

【5月号予告】

特集Ⅱ 子どもが元気なまち

地域づくり4月号

平成17年4月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131 (代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

し
っ
か
り
調
べ
て

し
っ
か
り
換
金
!

i・モードで

「i Menu」→「メニューリスト」→
「趣味」→「宝くじコーナー」→
「当せん番号案内」の順番に選択します。

テレホンサービスで

〈ナンバーズ・ロト専用電話〉
0570-004192

〈ジャンボ宝くじ専用電話〉
東京 03-3236-1192 大阪 06-6945-1300

〈数字選択式以外の宝くじについては〉
東京 03-3354-1192 大阪 06-6945-1192

※ほか全国都道府県別番号にて照会できます。
※詳しい番号については売り場等でお尋ねください。

インターネットで

<http://www.takarakuji.mizuhobank.co.jp>
へアクセスすると
当せん番号案内にて照会できます。

新聞・売り場なども
利用してね。

調べ方は
ほかにもあるよ。

これなら24時間
調べられるよ。



宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ



財団法人 日本宝くじ協会

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>